

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告87

- I 花岡山遺跡・高安古墳群 (第3次調査)
- II 花岡山遺跡・高安古墳群 (第4次調査)

2006年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



# 財団法人 八尾市文化財調査研究会報告87

- I 花岡山遺跡・高安古墳群 (第3次調査)
- II 花岡山遺跡・高安古墳群 (第4次調査)

2006年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

# は し が き

八尾市は、東側に生駒山地を望む河内平野のほぼ中央に位置しています。河内平野は、旧大和川水系がもたらした豊かな水と肥沃な土壌を背景として、先人たちが生活をする中で築いてきた痕跡が、貴重な文化遺産として数多く残されています。

近年、八尾市では、大小様々な開発事業が進められ、私たちに便利さや豊かさをもたらしてくれました。しかし、それは先人たちの残した文化遺産の破壊と引き換えになされてきたものでもあります。文化遺産である遺跡の一部は、整備・保存されていますが、すべての遺跡を現状のまま保存することは現実的に不可能であります。そこで、私共では、開発により破壊される遺跡については、発掘調査を実施し記録保存し、その資料を後世に残すことに努めております。

今回、平成15年度に実施致しました花岡山遺跡・高安古墳群第3次調査と平成16～17年度に実施致しました花岡山遺跡・高安古墳群第4次調査の発掘調査の整理作業が完了しましたので、その結果をまとめ、報告書として刊行する運びとなりました。

本書が地域の歴史を解明する資料及び学術研究の資料として、さらには文化財保護の啓発・普及のために広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査においてご協力いただきました関係各位の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、今後とも文化財保護へのより一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 前田 義秋

# 序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成15年度および平成16～17年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成17年12月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成13年10月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北（国土座標第Ⅵ系）を示している。
1. 遺構は下記の略号で示した。  
土坑—S K 溝—S D ピット—S P 落ち込み—S O
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
弥生土器・土師器・瓦器・瓦・木製品・石製品—白  
須恵器・陶磁器—黒
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 出土遺物については、以下を参考にした。  
『概説 中世の土器・陶磁器』1995 中世土器研究会編  
『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』1994 永井久美男編 兵庫埋蔵銭調査会
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を多数作成している。各方面での幅広い活用を希望する。

# 目 次

はしがき

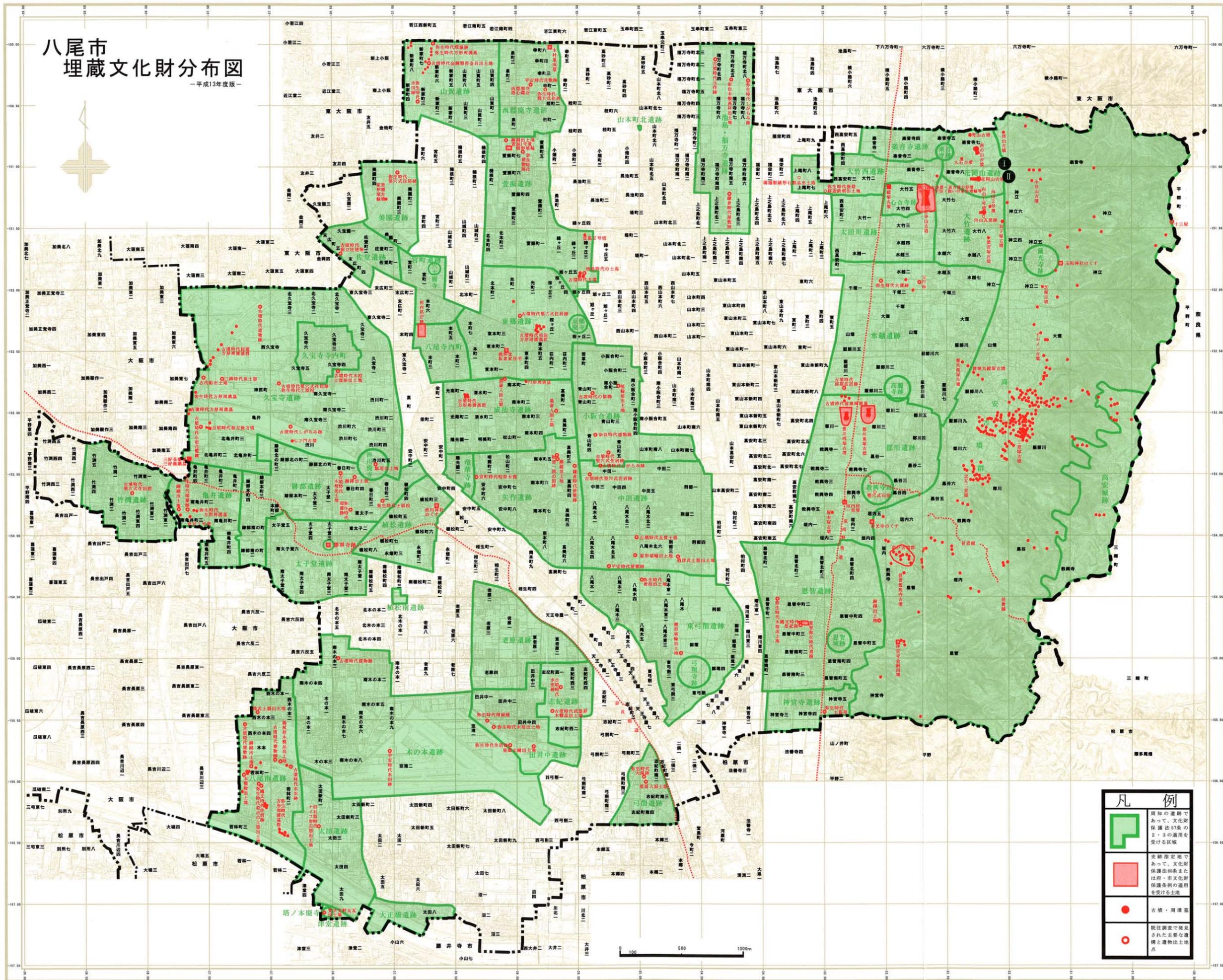
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 花岡山遺跡・高安古墳群 第3次調査(HO2003-3).....	1
II 花岡山遺跡・高安古墳群 第4次調査(HO2004-4).....	13
報告書抄録	

# 八尾市埋蔵文化財分布図

—平成13年度版—



凡例	
	周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適用を受ける区域
	史跡指定地であって、文化財保護法80条または府・市文化財保護条例の適用を受ける土地
	古墳・周溝墓
	既往調査で見出された主要な遺構と遺物出土地点

0 100 500 1000m

I 花岡山遺跡 第3次調査 (H O 2003-3)  
高安古墳群

# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大字楽音寺地内で行った、楽音寺中央農道建設に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する花岡山遺跡・高安古墳群第3次(HO2003-3)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年3月11日～3月31日(実働12日間)に成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は約48m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査・内業整理に参加した調査補助員は、岩本順子・鈴木裕治・曹 龍・張 益芬・都築聡子・徳谷尚子・中野靖之・横山妙子である。
1. 内業整理は、現地調査終了後随時行い、平成16年12月に完了した。
1. 本書作成にあたっては、遺物実測―飯塚直世・鈴木、トレース―山内千恵子、遺物写真撮影―岡田清一・成海、本文執筆・全体の構成―成海がおこなった。

# 本 文 目 次

1. はじめに.....	1
2. 調査概要.....	3
1) 調査の方法と経過.....	3
2) 検出遺構と出土遺物.....	3
3. まとめ.....	12

## 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	2
第2図	1区設定図	3
第3図	1区断面図	3
第4図	2区設定図	4
第5図	2区断面図	4
第6図	2区出土遺物実測図・表採遺物写真	5
第7図	3区設定図	6
第8図	3区平断面図	6
第9図	4区設定図	7
第10図	4区断面図	7
第11図	5区設定図	8
第12図	5区断面図	8
第13図	6区設定図	9
第14図	6区出土遺物実測図	9
第15図	6区平断面図	9
第16図	7区設定図	10
第17図	7区断面図	10
第18図	8区設定図	10
第19図	8区平断面図	11
第20図	8区出土遺物実測図	12

## 表 目 次

第1表	周辺の調査地一覧表	3
第2表	瓦質土管分類表	5

## 図 版 目 次

図版一	1区周辺 1区調査風景 1区西壁 1区北壁 2区周辺 2区調査風景 2区南壁 2区北壁
図版二	3区機械掘削状況 3区調査風景 3区全景 4区周辺 4区調査風景 4区全景 5区周辺 5区機械掘削状況
図版三	5区調査風景 5区西～北壁 6区周辺 6区全景 7区周辺 7区全景 8区周辺 8区調査風景
図版四	8区全景 8区西壁 8区北壁 出土遺物

# I 花岡山遺跡・高安古墳群第3次調査(HO2003-3)

## 1. はじめに

花岡山遺跡は、八尾市北東端の楽音寺6・7丁目、大字神立にあたり、生駒山地西麓の標高60～70mの斜面に位置している。当遺跡は、古墳時代前期の花岡山古墳・西の山古墳、中期の心合寺山古墳、中期末～後期の鏡塚古墳などからなる楽音寺・大竹古墳群内に位置しており、東方の山麓には、中期中葉の中谷山古墳、後期の群集墳である高安山古墳群、終末期の核山古墳などが存在している。

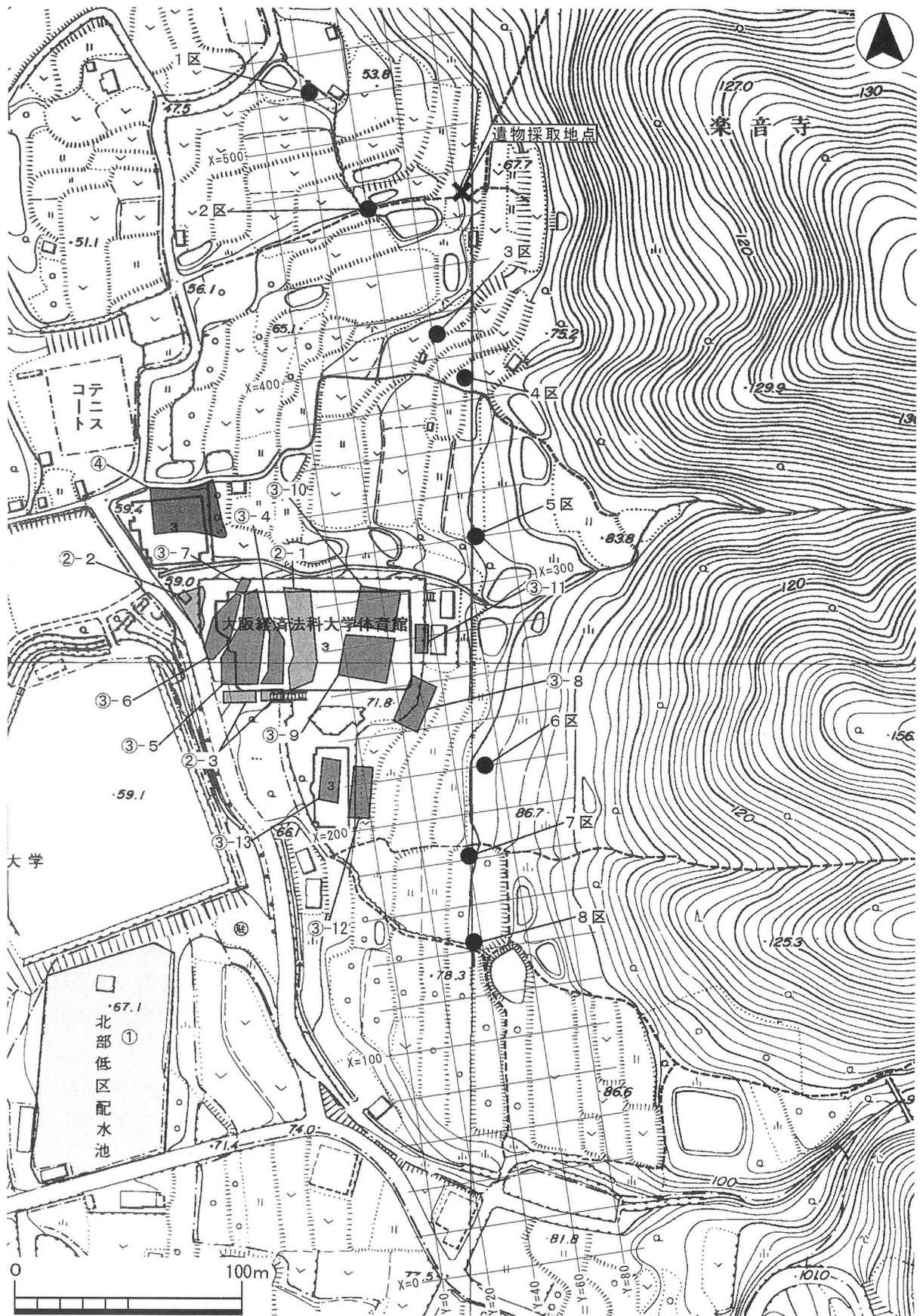
当遺跡発見の契機は、昭和53(1978)年、八尾市水道局北部低区配水池の工事中、この付近で遺跡・遺物の分布調査を実施中の大阪経済法科大学考古学研究会によって、中世の遺物包含層が確認されたことによる(第1図-①地点)。その後、八尾市の委託を受けた同考古学研究会では、「花岡山遺跡発掘調査団」を組織し、この遺物包含層に対応する遺構の存在を確認する目的で発掘調査をおこなった。その結果、鎌倉時代の居住地の存在が明らかになったほか、縄文時代の石鏃や古墳時代中期の円筒埴輪片や須恵器などが出土した。また、配水池予定地である旧花岡池の堤防断面の調査から、近世築堤技法の資料も得られた<sup>註1</sup>。

次いで、昭和62(1978)年、当調査研究会が行った第1次調査(②-1地点)では、室町時代中期(15世紀初頭)の土坑、集石遺構などが検出された<sup>註2</sup>。同年、「花岡山遺跡学術調査団」が行った調査では、西部の調査区(③-5・6地点)で弥生時代後期の土坑墓やピット群・溝などが検出され、東部の調査区(③-8・9地点)では、鎌倉時代前期(13世紀前半)・室町時代前期(14世紀)の建物群、室町時代中期(15世紀)の池庭状遺構・溝などが検出された<sup>註3</sup>。さらに、そこから北西50mで平成3(1991)年に当調査研究会が行った第2次調査では、鎌倉時代(13世紀)の土坑墓群などが検出された<sup>註4</sup>(④地点)。

②-1地点の集石遺構は、東側の高まりをテラス状に整地する際、③-9・10地点から落とし込んだ石で構成されたと考えられている。石とともに鎌倉時代初頭～室町時代の日常雑器が出土しており、最も古い遺構構築直前～同時期に石が落とされ始めたことがわかる。②-1地点の土坑内には炭・灰・焼土が堆積し、多量の瓦下粘土とともに、夥しい量の日常雑器・屋瓦などが出土した。調査者は、土坑の時期が③-8・9地点の最も新しい遺構群(池庭状遺構・溝)の廃絶時期～廃絶直後であることから、土坑は、それ以前の建物廃絶時の廃棄物の焼却を行った遺構であろうと考えている。一方、④地点の土坑墓群は、③-8・9地点の古い時期の建物群と同時期に存在していたことがわかる。

これらの調査の結果、中世の集落が鎌倉時代初頭に出現し、室町時代中期(15世紀初頭)に廃絶したことが判明した。そのほか、各調査地から縄文時代～平安時代の遺物が出土しており、周辺の調査結果などからも、これらの時代の遺構が存在する可能性を示唆している。

今回の調査は花岡山遺跡・高安古墳群第3次調査(略号HO2003-3)で、大阪府八尾市大字楽音寺地内でおこなった楽音寺中央農道建設に伴う予備調査である。調査は、山稜に沿って南北に延びる農道建設予定地内の8か所についておこなった。調査地は、生駒西麓の傾斜変換点(標高50～80m)付近に位置し、南北400mの範囲に点在しており、前述の調査地からは、東へ20～30m、山側に位置する(第1図・第1表参照)。



第1図 調査区周辺図 (S=1/2500)

第1表 周辺の調査地一覧表

※番号は、第1図・註と共通

番号*	略号	調査主体	調査期間	文献
①		花岡山遺跡発掘調査団	19781120～19790331	村川行弘・福田 薫他 1979「花岡山遺跡発掘調査概報」大阪経済法科大学考古学研究室内花岡山遺跡発掘調査団
②	HO89-01	(財)八尾市文化財調査研究会	19870112～19870328	原田昌則 1989「Ⅲ 花岡山遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告22
③		花岡山遺跡学術調査団	198704～198708	中井秀樹・山本 昭・田中賢人 1988「河内花岡山遺跡」大阪経済法科大学考古学報告集9集 花岡山遺跡学術調査団編
④	HO91-02	(財)八尾市文化財調査研究会	19910703～19910724	成海佳子 1997「Ⅳ 花岡山遺跡(第2次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』(財)八尾市文化財調査研究会

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

地区割りに際しては、工事用の任意座標を利用した。基準点XY=0は、南側を東西に走る「十三街道」と当農道延長部との交差点南西角付近である。Y軸は座標北から約9度西に振っている。高さの基準は、1区から北西25m地点の仮ベンチマーク(T.P.+50.334m)から移動した。調査区は北から1～8区とし、北から順次調査を実施した(第1図参照)。

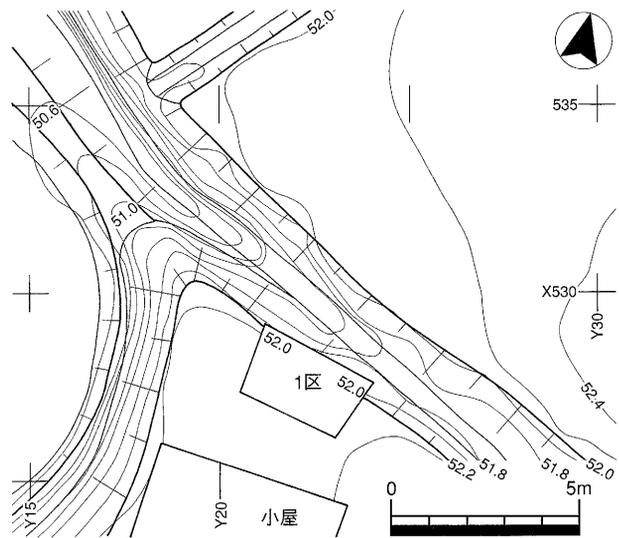
掘削に際しては、原則として、0.2～0.6m前後までの表土・作土などを機械掘削とし、以下地山面に至るまでを手掘りとした。写真撮影・平断面図作成・地形測量などは、随時行った。

### 2) 検出遺構と出土遺物

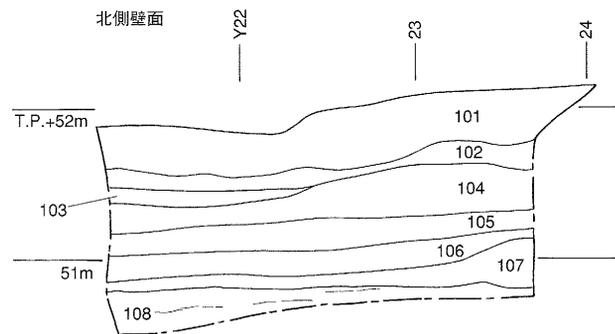
#### 〈1区〉

北西流する沢の南側の平坦地に位置する調査区である。旧状は耕作地で、部分的に産業廃棄物で埋め立てられている。付近の標高は52m前後を測り、緩やかに北西へ下がる。

ここでは、重機・人力併用で現地地表下1.4m前後までの掘削を行った。101～104層は、褐色系の砂質シルトを主体とする層で、作土・床土などにあたると思われる。現地地表下0.7～0.8mでグライ化した105～107層に至り、以下0.3～0.4mで植物遺体・粗粒砂のラミナを含む粘土質シルトからなる沼沢地状の堆積—108層に至る。この層上面で近世～近代の磁器片1点が出土した。



第2図 1区設定図 (S=1/200)



- 101 10YR4/6褐色中礫混砂質シルト～中粒砂
- 102 10YR5/6黄褐色中～大礫混砂質シルト
- 103 10YR4/6褐色中～大礫混中粒砂
- 104 10YR5/6黄褐色粗粒砂と7.5GY6/1緑灰色砂質シルト～粗粒砂のブロック
- 105 7.5GY6/1緑灰色～10YR4/4褐色砂質シルト～粗粒砂
- 106 7.5GY6/1緑灰色中礫混粗粒砂
- 107 7.5GY5/1緑灰色砂質シルト
- 108 5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトにN6/0灰色粗粒砂・植物遺体のラミナ

第3図 1区断面図 (S=1/50)

〈2区〉

1区から約50m南方に位置する調査区である。東西に伸びる里道から、北側の溜池(現状はカラ池)にかけての斜面に設定した。里道上面の標高は60.6mで北は溜池堤の石垣となって落ちる。

ここでは、現地表面以下1.5~2m前後までの掘削を人力のみで行った。

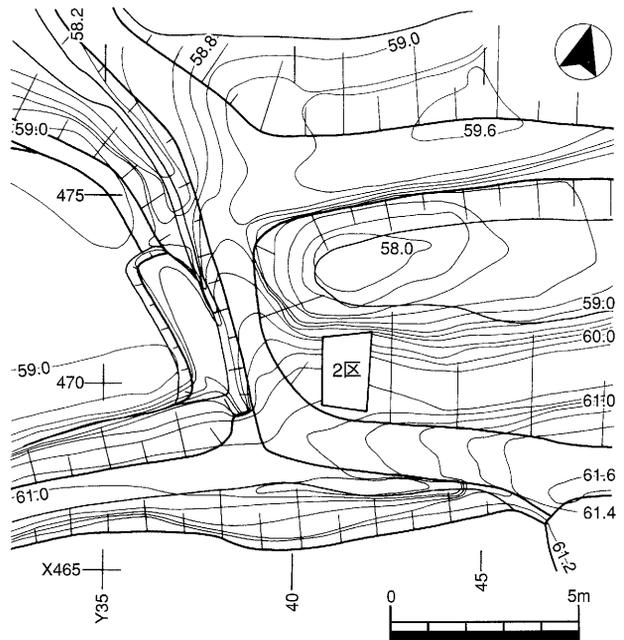
表土201層は厚さ0.6~0.7mあり、それ以下0.7mにブロックや互層202~209層、北端で溜池護岸の石垣に、中央以南ではいわゆる地山210層に至る。地山上面の標高は59m前後で石垣上面より0.2~0.3m外側を溝状に掘り込んでいる。202・203層は里道の転落土・溜池護岸・池さらえ時の盛土など、204~208層は里道盛土、209層は石垣の裏込めである。

裏込め内から、瓦器碗・軒丸瓦・平瓦・瓦質土管(1)が数点出土している。瓦質土管は、これまでの出土例から、溜池への取排水施設である暗渠に利用していた可能性が高いが、今回の調査では確認できていない。

瓦質土管1は受口状に開く広口部をもつもので、広口径16cm・体部径13.5cm・厚さ1cmを測る。指オサエ・タタキ・ハケなどで調整されている。

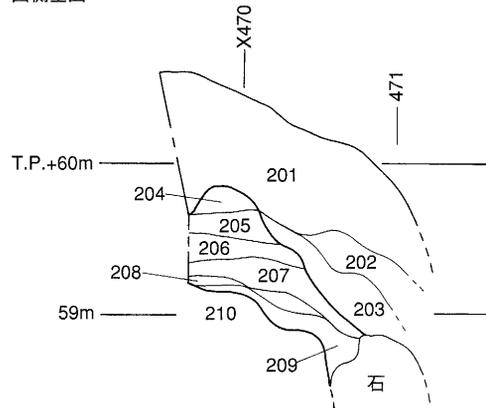
瓦質土管は接続法から、「鉄砲継」・「印籠式」の2種があり、仮に前者をA類・後者をB類とし、A類を形態の違いから4種(A1~A2)に分けた。近隣の出土例を分類したものが第2表である。花岡山遺跡第1次調査(HO86-1)、恩智遺跡第4次調査(OJ89-4)、心合寺山古墳第1次調査(SO89-1)、同第3次調査(SO98-3)から出土しており、いずれも、暗渠または樋管に利用されている。

このうち、SO89-1では、「正徳六年」(西暦1716年)の墨書がある礎板上に瓦質土管をつないだ樋管が検出され、この樋管が1716年(江戸時代中期)以降に作られたことがわかる。



第4図 2区設定図 (S=1/200)

西側壁面



- 201 10YR4/6褐色中礫混中粒砂
- 202 10YR4/6褐色砂質シルト
- 203 10YR4/6褐色粘土質シルト
- 204 10YR4/6褐色中礫混中粒砂と7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトのブロック
- 205 7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトと10YR4/6褐色大礫のブロック
- 206 10YR4/6褐色大礫に7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト少量混
- 207 10YR4/4褐色中~粗粒砂と7.5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトの互層
- 208 10YR4/4褐色中~粗粒砂に10YR4/6褐色大礫
- 209 7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト
- 210 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト

第5図 2区断面図 (S=1/50)

第2表 瓦質土管分類表

タイプ	細分	出土遺跡/遺構	時期	法量 (cm)			
				広口部径	狭口部径	長さ	厚さ
鉄砲継(A)	A1 受け口状に開く	H O 86-1/S D-1	近世初頭以降	13.0	—	—	1.0~1.5
		S O 98-3/樋管2掘形内		15.0~18.0	13.0~16.0	25.0	1.0~1.5
		O J 89-4/暗渠1		13.4	8.4	25.0	1.0~1.5
	A2 ラップ形に開く	S O 98-3/樋管2掘形内		18.0	—	—	1.0~1.5
	A3 直線的に開き内面に段をなす	O J 89-4/暗渠1		14.1	11.3	18.1	0.7
A4 狭口部~広口部まで直線的に開く	S O 89-1/溜池堤の樋管	1716年以降	—	14~15	—	1.0~1.5	
印籠式(B)	円筒形で一端が玉縁状に突出する。玉縁状の突出部を広口部へ継ぐ	H O 86-1/S D-1		—	11.0	—	2.0
		O J 89-4/暗渠2		16.0	12.0	33.0	2.0

## 参考文献

- H O 86-1 原田昌則 1989「Ⅲ花岡山遺跡(第1次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告22』  
 S O 98-3 成海佳子 2000「Ⅷ心合寺山古墳(第3次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』  
 O J 89-4 原田昌則 1990「12. 恩智遺跡(第4次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告28』  
 S O 89-1 原田昌則 1990「19. 心合寺山古墳(第1次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告28』

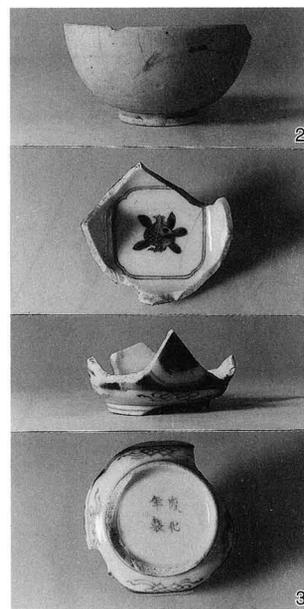
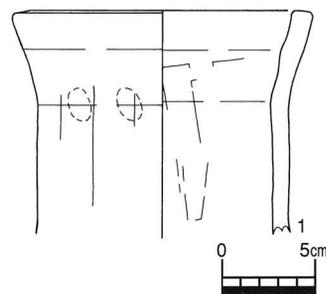
S O 89-1 出土例はA4類で、A3・A4類およびB類は器壁が厚く大型で銀化し、製作技法は近世の瓦に似る。一方、今回出土した瓦質土管はA1類で、A1・A2類の土管は器壁が薄く、指オサエ・タタキ・ハケなどで調整されており、製作技法は近世の日常雑器類に近い。B類は近代まで残るがA類は残らないため、一段階古いものと考えてもよいかもしれない。

## 〈表採遺物について〉

現在の楽音寺集落は、調査地より西300~400m付近に位置するが、かつては2区付近にあったと言われている。土地所有者から、『疫病のため村が移住した』と聞いている。村の北にある古墳を『西の山』と呼ぶのも、村から見て西にあったからだ。2区の東方に神社があり、今も鳥居が倒れている。」と教えられた。その付近には、鳥居の足が里道斜面に倒れており、陶磁器・瓦片・瓦下粘土などが散乱していた。碗(2)・筒形碗(3)は、そこからの表採遺物である。

碗2はやや小型の器種で、外面は簡略化した草花文、高台外面に数珠の圈線を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎ、胎土は灰白色を呈し、釉薬の発色は悪い。口径10.5cm・高台径4.5cm・器高5.2cmを測る。筒形碗3は外面を四分割して草花文などを施し、見込みには柘榴の文様が描かれ、高台裏面には「成化年製」の銘がある。釉の発色は良く、胎土も白色を呈する。高台径6.0cmを測る。

波佐見焼の例では、碗に見られる小型化・文様の簡略化・蛇の目釉剥ぎは、V-1期(1680~1740年)に現れること、筒型碗はV-2期(1750~1770年)以降に出現することなどから、これらは18世紀半ば以降のものと考えられる。



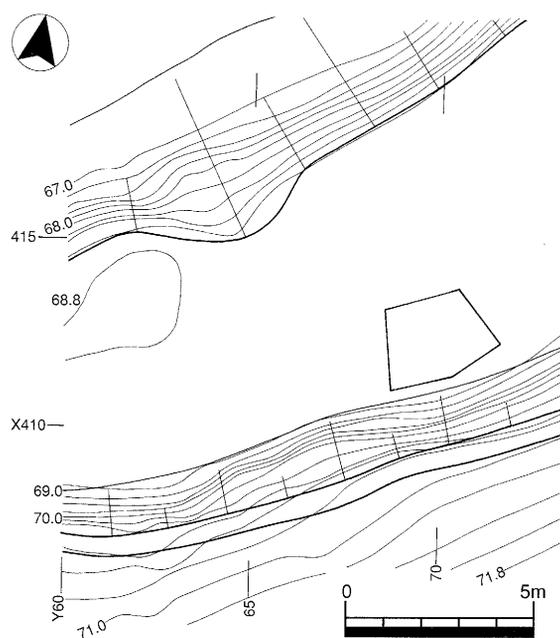
第6図 2区出土遺物実測図(S=1/4) 表採遺物写真(約1/4)

〈3区〉

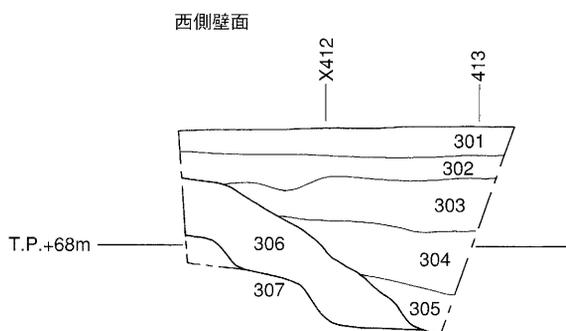
2区から約60m南方に位置する調査区である。北西に伸びる尾根状の末端近くに位置する。上面の標高は68.5~68.9mで、北西へ下がっている。旧状は棚田状に成形された耕作地で、北西へは2m・南東へは4m程度の段差がある。

ここでは、現地表下0.3~0.4m前後を重機で掘削し、以下の0.4~1.4mを人力掘削として調査を行った。

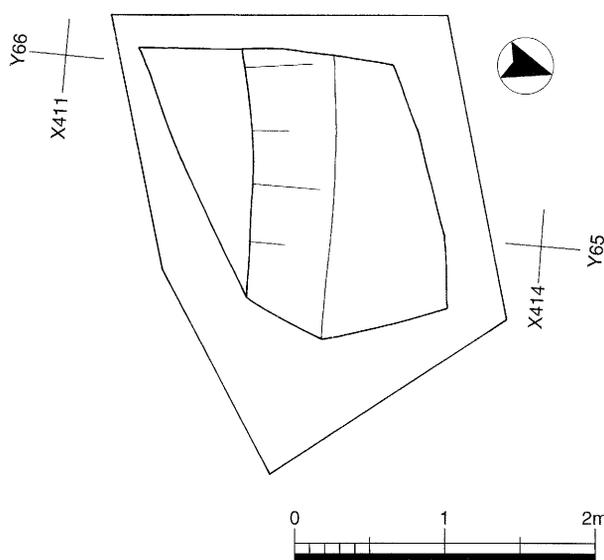
表土301層は厚さ0.15~0.2mあり、以下に作土・床土・整地の可能性のあるブロック302~304層が0.2~1.0mにわたって堆積する。次いで地山の流出土と考えられる明黄褐色砂質シルトを主とする305~306層が0.3~0.4m程度あり、地山307層に至る。地山上面の標高は67.2~68.1mで、北~北西へ下がる。306層には、木の根の痕か、褐灰色粘土質シルトがラミナ状に入っている。



第7図 3区設定図 (S=1/200)



- 301 10YR4/3にぶい黄褐色中礫混砂質シルト
- 302 10YR5/2灰黄褐色中礫混砂質シルトと10YR7/6明黄褐色粘土質シルトのブロック
- 303 10YR7/6明黄褐色中礫混粘土質シルトと10YR6/1褐灰色粘土質シルトのブロック
- 304 10YR7/6明黄褐色中粒砂~中礫混粘土質シルトのブロック
- 305 10YR7/6明黄褐色砂質シルト
- 306 10YR6/6明黄褐色砂質シルトに10YR6/1褐灰色粘土質シルトがラミナ状に混入
- 307 10YR6/6明黄褐色砂質シルト



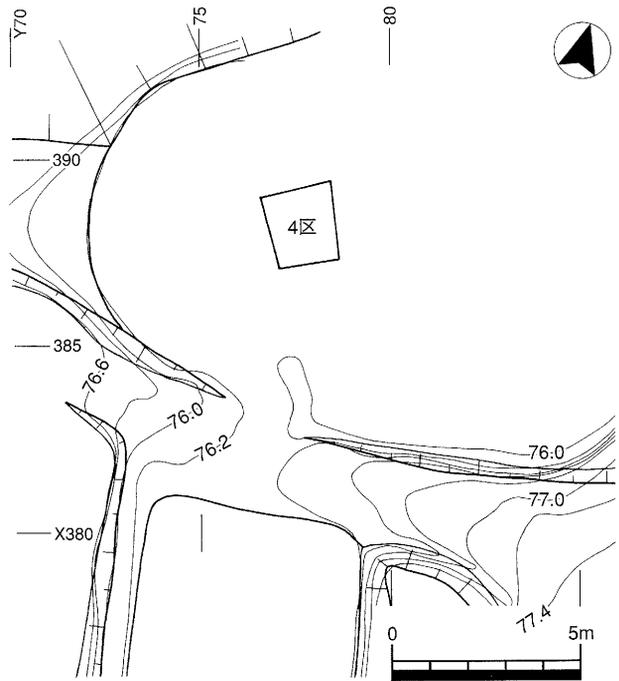
第8図 3区平断面図 (S=1/50)

〈4区〉

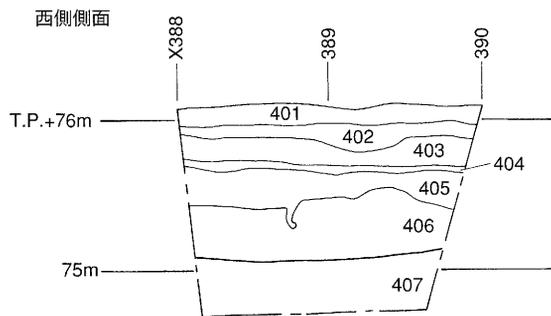
3区から約25m南方に位置する調査区で、西に伸びる尾根状の高まりに位置する。上面の標高は76.1~76.2mで、3区より7mほど高くなっている。現状は平坦に成形された耕作地で、南に里道、西~北には3m程度の段差で下がっている。

ここでは、現地地表下1.3m前後まで、重機・人力併用で掘削し、調査を行った。

表土(現耕土)401層は厚さ0.1~0.2mあり、床土・整地の可能性のあるブロック402・403層が厚さ0.2~0.4m堆積する。以下には作土の可能性のある404層黒褐色粗粒砂~砂質シルトが堆積するが、厚さは0.1m未満と非常に薄く、上面は削平されている可能性が高い。次いで整地層・床土の可能性のある405層が0.1~0.3mあり、地山の流出土と考えられる406層が0.3~0.5m堆積し、地山407層に至る。地山上面の標高は75.1m前後である。



第9図 4区設定図 (S=1/200)



- 401 10YR4/2灰黄褐色中礫混砂質シルト
- 402 10YR6/6明黄褐色粗粒砂~大礫と2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトのブロック
- 403 10YR7/6明黄褐色粗粒砂と10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトのブロック
- 404 10YR3/2黒褐色粗粒砂~砂質シルト
- 405 5Y6/2灰オリーブ色巨礫混粘土質シルト
- 406 5Y6/2灰オリーブ色粘土質シルト混10YR7/4にぶい黄橙色粗粒砂~巨礫
- 407 10YR6/6明黄褐色砂質シルト

第10図 4区断面図 (S=1/50)

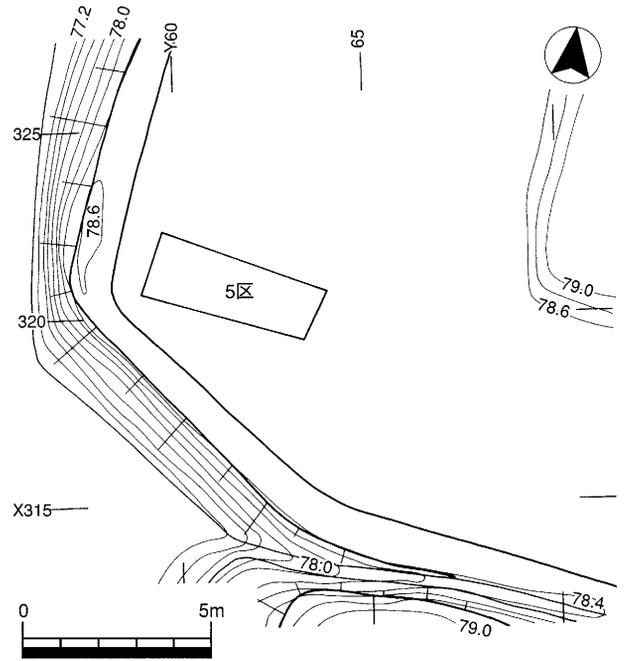
〈5区〉

4区から約70m南方に位置する調査区で、西流する谷の北側に位置する。上面の標高は78.4~78.5mを測る。現状は平坦に成形された耕作地で、西は2m程度下がり、東は1m程度上がって耕作地(棚田)となっている。南側に位置する谷間はこの付近で最も深いもので、そこに溜池が構築されている。

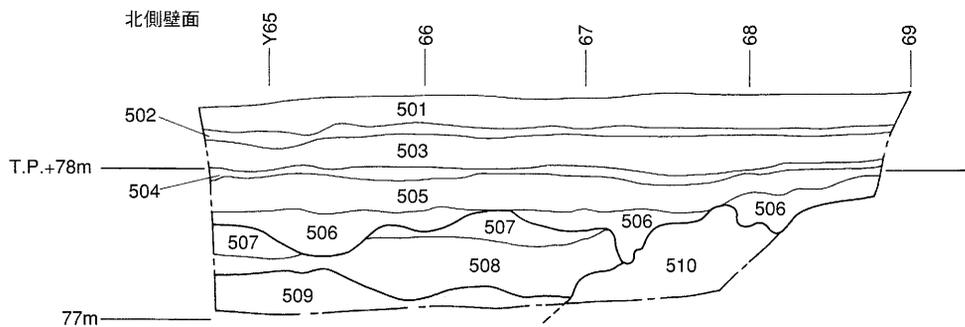
ここでは、現地地表下0.5~0.6m前後までを重機で、以下0.1~0.6mを人力掘削とし、調査を行った。

表土(現耕土)501層は厚さ0.15~0.25m、床土502層は厚さ0.05~0.1mがあり、再び作土503層、床土504層が同様に堆積する。

505層は層厚0.05~0.25mで、土師器・須恵器・瓦器の極小片・炭を少量含むいわゆる遺物包含層である。その直下に遺構埋土の可能性のある506層が見られたが、平面的に明確な掘形は検出できなかった。東部ではその直下で地山510層に至るが、西部ではその間に、地山の流出土あるいは整地層と考えられる507~509層(0.3~0.5m)が堆積する。507層上面の標高は77.7~77.8mとほぼ水平に整えられている。地山上面の標高は77.2~77.8mで、東から西へ急激に落ち込んでいる。



第11図 5区設定図 (S=1/200)



- 501 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂~中礫混砂質シルト
- 502 10YR6/6明黄褐色粗粒砂~大礫と2.5Y6/2灰黄色砂質シルトのブロック
- 503 10YR7/4にぶい黄橙色粗粒砂~中礫と2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトのブロック
- 504 10YR6/6明黄褐色中礫混砂質シルト
- 505 10YR4/4褐色中礫混砂質シルト~粗粒砂
- 506 10YR4/4褐色巨礫混粘土質シルト~砂質シルトと2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトのブロック
- 507 10YR5/6黄褐色粗粒砂と2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトのブロック
- 508 10YR6/6明黄褐色粗粒砂~大礫と2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトのブロック
- 509 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂~巨礫混2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト~砂質シルト
- 510 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト

第12図 5区断面図 (S=1/50)

< 6区 >

5区から約100m南方に位置する調査区で、西に広がる扇状地に位置する。上面の標高は80.7~80.8mを測る。旧状は平坦に成形された耕作地で、西へは4m・北へは2m程度下がって耕作地となっている。

ここでは、現地表下1m前後までを重機で、以下0.5~0.6mを人力掘削とし、調査を行った。

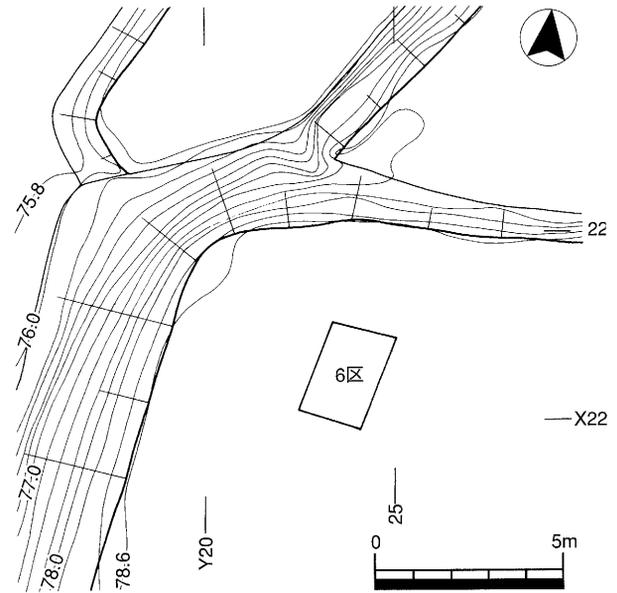
表土(現耕土)601層は厚さ0.2~0.35m、以下にはブロック602~604層があり、グライ化した605層が北西へと下がっていく。さらにブロック606層があり、609を切って607・608が北西方向へ下がって堆積する。それ以下には609・610層があり、標高79m前後で地山611層に至る。

609層からは土師器小皿(4)、瓦器碗(5)などが出土し、611層上面では、溝状遺構1条(SD601)・土坑(SK601)を検出した。

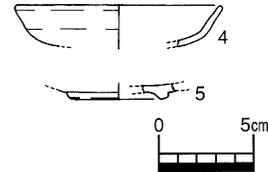
土師器小皿4の口縁部はつまみ上げ気味に終わる粗雑なつくりで、室町時代中頃(15世紀代)に比定できる。瓦器碗5は高台のみの破片である。高台は断面方形で低く、鎌倉時代後半(13世紀代)に比定できる。

SK601はほぼ円形を呈し、径0.2m・深さ0.1mを測る。内部には610層が堆積する。

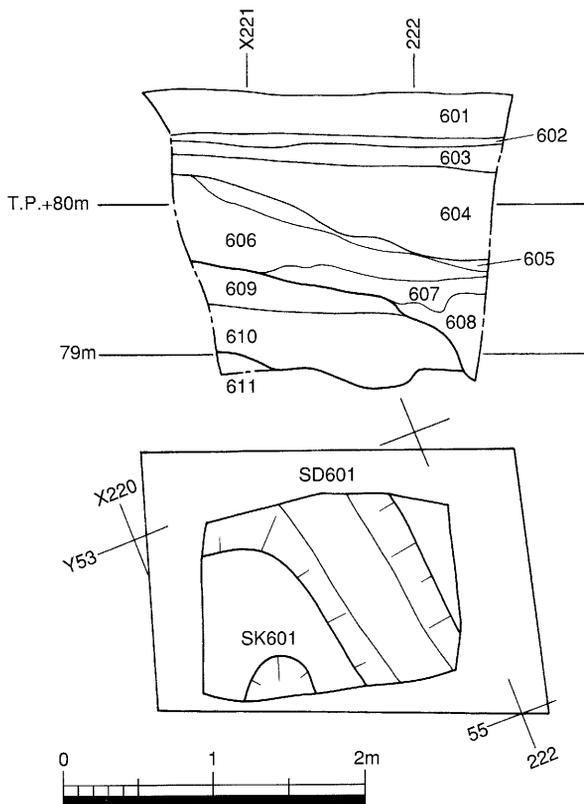
SD601は幅0.3~0.4m・深さ0.2m、検出長1.4mを測る。調査区北東隅から南西隅に向かって、にぶい弧を描いて曲がる。内部には610



第13図 6区設定図 (S=1/200)



第14図 6区出土遺物実測図 (S=1/4)



第15図 6区平断面図 (S=1/50)

- 601 10YR4/3にぶい黄褐色中~粗粒砂混砂質シルト
- 602 10YR6/6明黄褐色粗粒砂と2.5Y6/2灰黄色砂質シルトのブロック
- 603 10YR6/6明黄褐色粗粒砂と10YR4/4褐色砂質シルトのブロック
- 604 10YR5/6黄褐色砂質シルト~中礫のブロック(拳大の礫散見される)
- 605 5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト
- 606 10YR4/4褐色砂質シルト~大礫(人頭大の礫散見される)
- 607 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト~砂質シルト
- 608 10YR5/1褐灰色砂質シルト~中粒砂
- 609 10YR5/3にぶい黄褐色中礫混砂質シルト
- 610 10YR5/3にぶい黄褐色中礫混砂質シルト~細粒砂
- 611 10YR6/6明黄褐色大礫

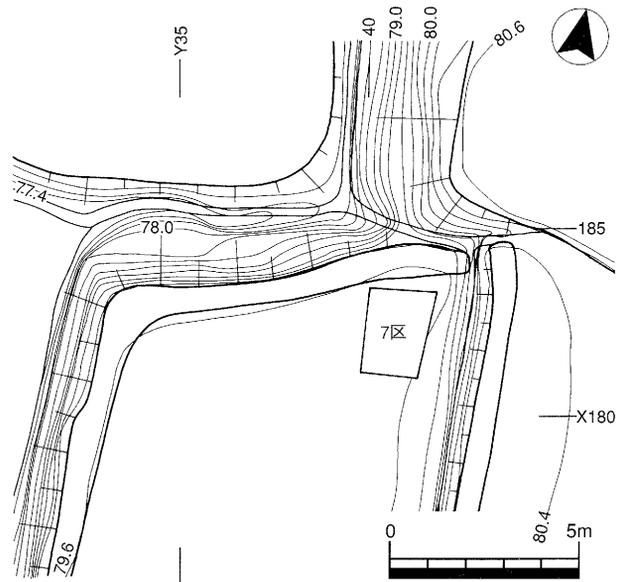
層10YR5/3にぶい黄褐色中礫混砂質シルト～細粒砂が堆積する。611層上面のみで遺構を捉えたが、605層以下が北西へ下がっており、605～610層すべてが遺構内埋土、斜面の流出堆積土の可能性もある。

〈7区〉

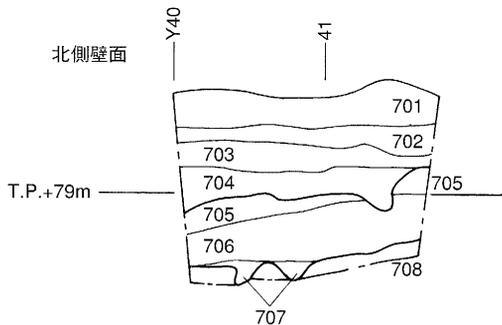
6区から約40m南方に位置する調査区で、東西に伸びる里道の南側に設定した。上面の標高は79.6～79.7mを測る。現状は平坦に成形された耕作地で、東には高さ1m程度の石垣が生まれ、植木畑となっている。

ここでは、現地表下1.5m前後までを重機・人力併用で掘削し、調査を行った。

表土(現耕土)701層は厚さ0.2～0.35m、北端



第16図 7区設定図 (S=1/200)



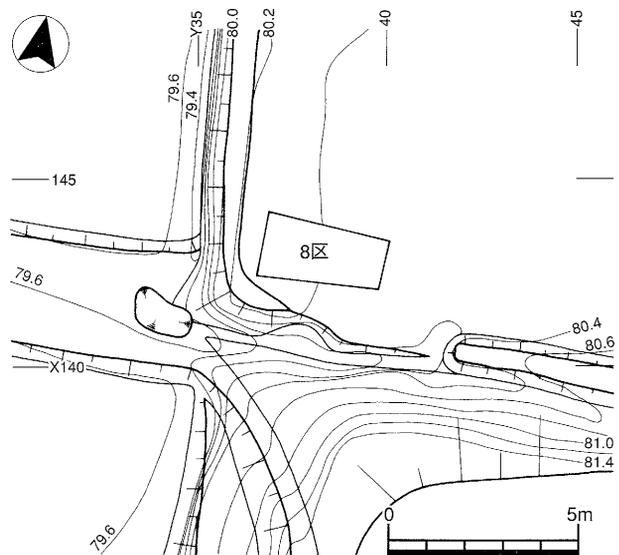
- 701 10YR4/3にぶい黄褐色中～粗粒砂混砂質シルト
- 702 2.5Y6/2灰黄色～10YR3/3暗褐色中礫混砂質シルト
- 703 10YR5/4にぶい黄褐色中礫混砂質シルトと2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトのブロック
- 705 10YR6/6明黄褐色粗粒砂混粘土質シルトと2.5Y6/1黄灰色粘土質シルトのブロック(拳大の礫散見される)
- 706 10YR6/6明黄褐色粗粒砂混砂質シルト
- 707 10YR6/6明黄褐色粗粒砂混粘土質シルト
- 708 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト混中礫に2.5Y7/1灰白色粘土質シルトがラミナ状に混入

第17図 7区断面図 (S=1/50)

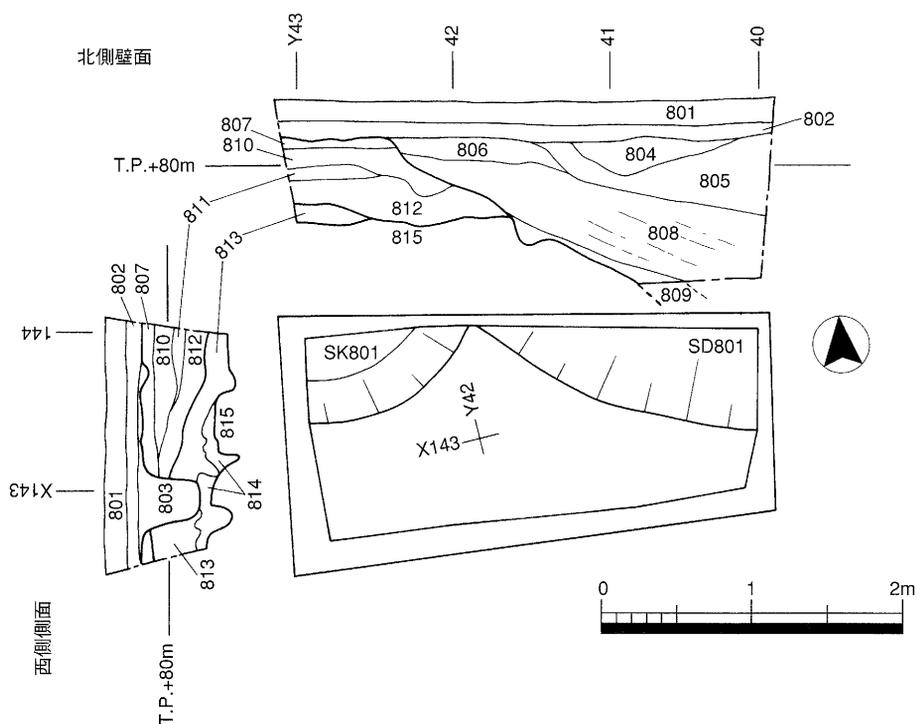
は畦状に盛り上がっている。以下には床土・整地層と考えられるブロック702～704層がある。次いで705～707層があり、地山708層に至る。708層上面の標高は、78.5～78.7mで、西下がりである。704層は705層を切り、南西下がりには堆積するブロック層からなり、人為的に埋め立てられた可能性が高い。

〈8区〉

7区から約40m南方に位置する調査区で、東西に伸びる里道の北側に設定した。上面の標高は80.4～80.5mを測る。旧状は平坦に成形された耕作地で、西～南側は1m程度下がった耕作地、2m程度上がって溜池となっている。



第18図 8区設定図 (S=1/200)



- 801 10YR4/4褐色中礫混砂質シルト
- 802 2. 5Y6/2灰黄色中礫混砂質シルト
- 803 7. 5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂
- 804 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂
- 805 10YR4/4褐色砂質シルト～粗粒砂のブロック
- 806 10YR4/4褐色粗粒砂
- 807 10YR4/2灰黄褐色中礫混粗粒砂
- 808 10YR5/6黄褐色粗粒砂～大礫(ラミナあり)
- 809 2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルト混粗砂(ラミナあり)
- 810 10YR5/4にぶい黄褐色中礫混砂質シルト～粗粒砂のブロック
- 811 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～中礫のブロック
- 812 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～中礫混砂質シルトのブロック
- 813 10YR4/3にぶい黄褐色中～大礫混砂質シルト～粗粒砂のブロック
- 814 2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルト
- 815 10YR5/6黄褐色中礫

第19図 8区平断面図(S=1/50)

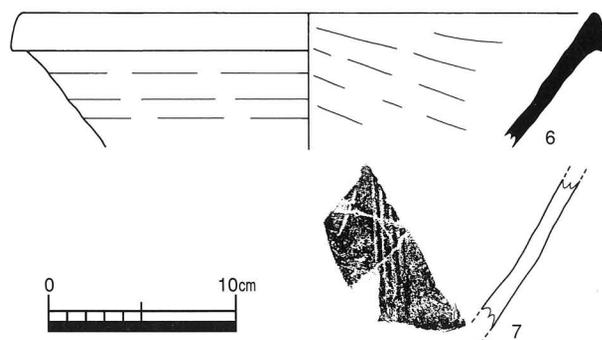
ここでは、現地地表下0.3～0.5m程度までを重機で掘削し、以下0.6～0.8m程度を人力掘削とし、調査を行った。

表土(現耕土)801層・床土802層は厚さ0.1～0.2mで水平に堆積する。それ以下は804～807層で北下がりの微地形を数回埋め立て・整地しているようである。地山上面の標高は79.6～79.7mである。

整地層直上では、遺構の可能性のある落ち込み(803層)を壁面で確認した。整地層直下の813層上面では、土坑1基(SK801)を検出した。また、地山上面では北方向へ落ちる溝1条(SD801)を検出した。

落ち込みは、西壁南端で確認した。807層上面に構築されている。検出幅0.4m・深さ0.4mを測る。内部には803層が堆積している。

S K 801は調査区北西隅で検出した。813層を切って構築されている。検出した範囲は東西1.0m・南北0.5mで、円形を呈するものと考えられる。検出部での最深は0.45mを測る。内部には、ブロック810～812層が堆積している。812層からは、東播系須恵器こね鉢(6)・甕、瓦質すり鉢(7)が出土した。こね鉢6は口縁部の特徴から14世紀末以降のものと思われる。すり鉢は、瓦質のもの初現が



第20図 8区出土遺物実測図(S=1/4)

15世紀頃に比定されていることから、S K 801の時期は室町時代中期(15世紀)以降と考えられる。

S D 801は調査区北東で検出した。813層・S K 801を切って北へ落ち込んでいる。深さ0.5m程度までしか確認できなかった。内部にはラミナを含む808・809層が堆積しており、湧水は極めて多い。S K 801を切っていることから、室町時代中期以降に開削されたことがわかる。

### 3. まとめ

今回の調査では、1区で近世～近代に埋まった溜池、2区では近世に作られた溜池とそれに伴う瓦質土管、6区で鎌倉時代の遺構・遺物、8区で室町時代の遺構・遺物を検出したほか、5・7区では遺構の可能性のある地層、および鎌倉～室町時代の遺物を検出している。これまでの調査でも、鎌倉～室町時代の遺構を検出しており、この時期の集落は今回調査の5区以南に集中するものと考えられる。

一方、2区東方の表採遺物は18世紀中頃以降のもので、地元の伝承通りとは言えないまでも、18世紀中頃の瓦葺建物が2区付近にあったことが裏づけられたといえる。

圖

版



1区周辺(北から)



1区調査風景(南から)



1区西壁



1区北壁



2区周辺(西北から)



2区調査風景(北西から)



2区南壁



2区北壁



3区機械掘削状況(西から)



4区周辺(南東から)



3区調査風景(南西から)



4区調査風景(南東から)



3区全景(南東から)



4区全景(南東から)



5区周辺(北東から)



5区機械掘削状況(北東から)



5区調査風景(北東から)



5区西～北壁



6区周辺(北東から)



6区全景(南東から)



7区周辺(東から)



7区全景(南東から)



8区周辺(南東から)



8区調査風景(西から)



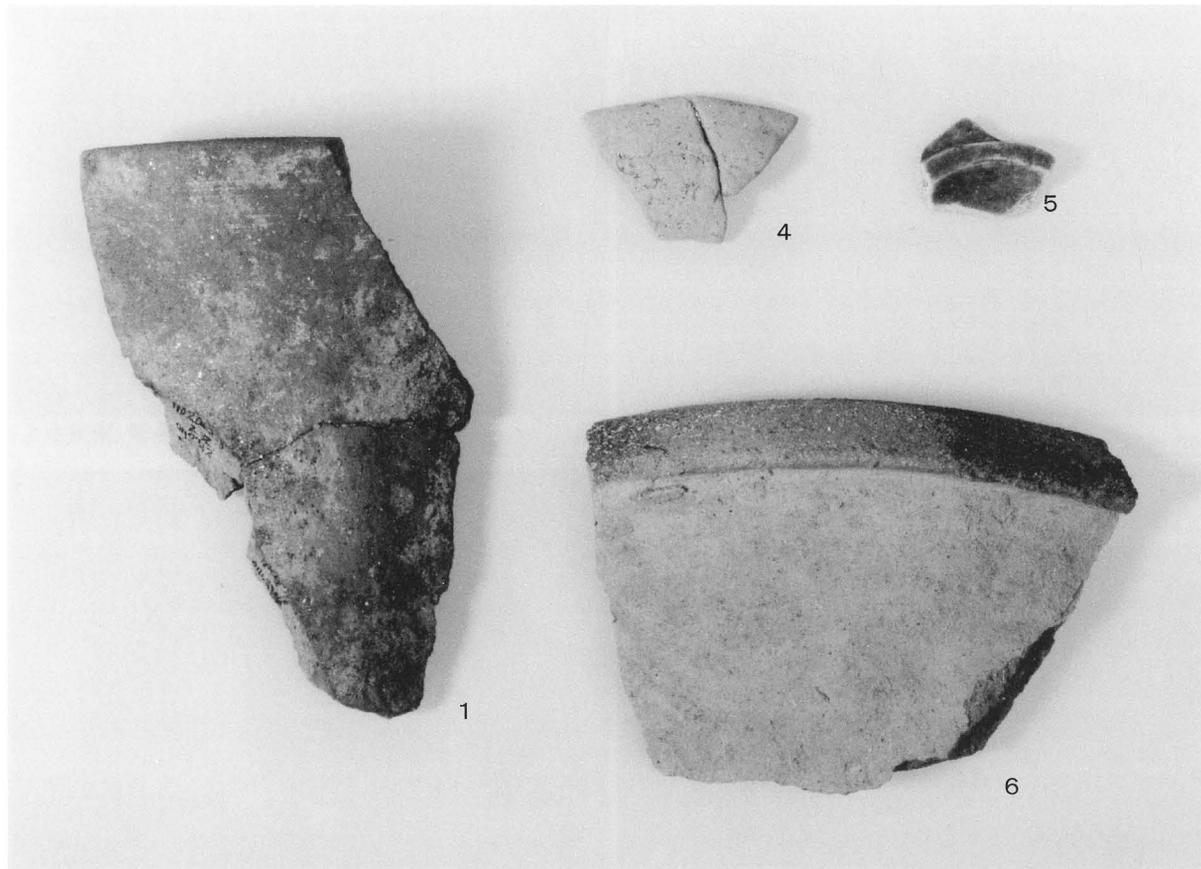
8区全景(東から)



8区西壁



8区北壁



出土遺物

II 花岡山遺跡 第4次調査 (H O 2004-4)  
高安古墳群

# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大字楽音寺地内で行った、楽音寺中央農道建設に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する花岡山遺跡・高安古墳群第4次(HO2004-4)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成16年12月15日～平成17年6月24日に、その1・その2の2期に分けて成海佳子を担当者として実施した。  
その1：平成16年12月15日～12月17日(実働3日間)  
調査面積 10m<sup>2</sup>  
現地調査参加者 鈴木裕治・細谷利美  
その2：平成17年4月21日～6月24日(実働37日間)  
調査面積 389.25m<sup>2</sup>  
現地調査参加者 飯塚直世・垣内洋平・國津れい子・鈴木裕治・竹田貴子・徳谷尚子・實樹婦美子・若林久美子
1. 内業整理は、現地調査後随時行い、平成17年12月28日に終了した。内業整理の参加者は、上記のほか、岩本順子・都築聡子・西森忠幸である。
1. 本書作成にあたっては、遺物実測—飯塚・市森千恵子・加藤邦枝・國津・鈴木・徳谷・中村百合・細谷、トレース—市森、遺物写真撮影・本文執筆・全体の構成—成海がおこなった。

# 本文目次

1. はじめに	13
2. 調査概要	13
1) 調査の方法と経過	13
2) 1区の概要	14
3) 2区の概要	16
4) 3区の概要	23
5) 4区の概要	27
3. まとめ	34

## 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	13
第2図	1区平断面図	14
第3図	1区出土遺物実測図	15
第4図	1区・2区設定図	16
第5図	2区平断面図	17-18(折込)
第6図	S P 201~203断面図	19
第7図	S P 204・S D 201断面図	20
第8図	石垣断面図	21
第9図	2区出土遺物実測図	22
第10図	3区・4区設定図	23
第11図	3区出土遺物実測図	24
第12図	3区平断面図	25-26(折込)
第13図	4区出土遺物実測図-1	28
第14図	4区平断面図	29-30(折込)
第15図	S K 4201平断面図	31
第16図	4区出土遺物実測図-2	33

## 表 目 次

第1表	3区溝一覧表	24
第2表	4区ピット一覧表	32

## 図 版 目 次

図版一	1区全景 1区最終面全景 2区調査前の状況 2区全景(南から) 同(北から)
図版二	3区調査前の状況 3区第1面遺構掘削状況 3区第1面全景 3区第2面遺構掘削状況 S K 3201 3区第2面全景
図版三	4区調査前の状況 4区第2面遺構掘削状況 4区第2面遺構検出(南西から) 同(北西から) 4区第2面全景 4区第1面(手前)・第2面(奥)全景
図版四	出土遺物

## Ⅱ 花岡山遺跡・高安古墳群第4次調査(HO2004-4)

### 1. はじめに

今回の調査は花岡山遺跡第4次調査(略号HO2004-4)で、第3次調査の結果を踏まえて行ったものである。第3次調査では、中央以南の5～8区で鎌倉・室町時代の遺構・遺物を検出したことから、付近に中世の集落のあることが想定された。

そこで、今回の調査では、中央以南で、工法が切り土による部分の4か所(北から1～4区)が調査対象となった。なお、3次調査の5区は2区の南端に、6区は4区の北端に重複している(第1図参照)。周辺の既往調査等については、本書Ⅰ 第3次調査を参照されたい。

### 2. 調査概要

#### 1) 調査の方法と経過

地区割りに際しては、前回同様、工事用の任意座標を利用して調査を進めた。調査終了後、世界測地系座標を用いたため、本報告では2つの座標を表示している。任意座標は、国土座標に対して約9度西へ振っている。

各調査区の地区割りは、南北に長い2区～4区のみ、任意座標の10mピッチで北からA・B・C…とし、2区北端は2A区、4区南端は4P区と呼んだ。

高さの基準は、1区から北西20mの仮ベンチマーク(標高74.576m)から移動した。

調査区は北から1～4区とし、北から順次調査を実施した。掘削に際しては、0.5m前後の表土・作土・床土などを機械掘削とし、以下、いわゆる地山面に至るまでを手掘りとした。地形測量・写真撮影・平断面図作成などは、随時行った。4か所の調査区のうち、北端の1区は第4次調査—その1とし、2～4区は第4次調査—その2として調査を行った。



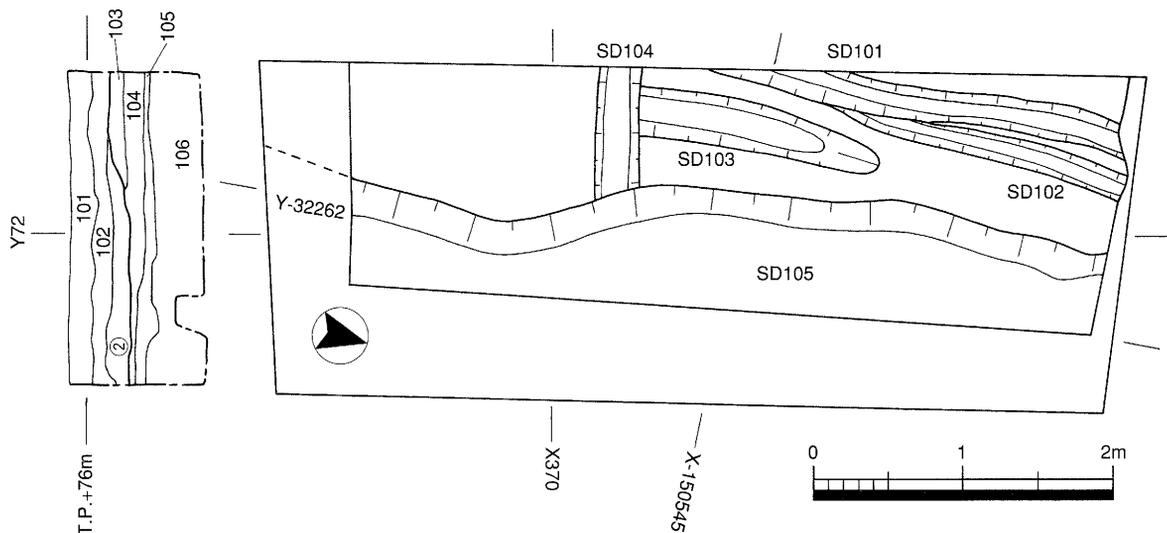
第1図 調査地周辺図 (S=1/2000)

## 2) 1区の概要

3次調査4区の南20m地点に位置する調査区である。3次調査4区同様西方へ伸びる尾根状の高まりの縁辺部にあたる。旧状は耕作地で西・南には畦畔が作られている。上面の標高は76.1～76.2m前後を測り、平坦である。ここでは、約0.3m厚さの表土(作土)・床土を重機で掘削し、以下0.5m程度を人力で掘削した。一部をさらに人力掘削し、最終的には現地表下1m(標高75.2m)までの地層を確認した。

### 〈層序〉

- 101層：5Y4/2灰オリーブ色粗粒砂混粘土質シルト～極細粒砂。層厚0.1～0.2mを測る。調査直前までの作土である。
- 102層：10YR6/8明黄褐色粗粒砂・灰黄褐色(10YR6/2)粘土質シルトのブロック。層厚0.1～0.15m、床土である。酸化鉄を多量に含み、炭・土師器の極小片を極少量含む。
- 103層：10YR6/2灰黄褐色砂質シルト。層厚0～0.1m、酸化鉄を少量含む。土師器・瓦器・白磁・瓦質土管などを含む。この層上面で、溝群からなる遺構面を検出した。上面の標高は75.6～75.8mを測る。
- 104層：10YR5/3にぶい黄褐色中礫混粗粒砂に明黄褐色(10YR6/8)粘土質シルトのブロック。層厚0.05～0.15m、上面に酸化鉄の沈着が見られる。
- 105層：10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～中礫混粘土質シルト。層厚0.05～0.1m、土師器・瓦器・瓦の極小片、拳大の礫、炭等を含む。
- 106層：10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～大礫・10YR6/6明黄褐色粗粒砂のブロック。層厚0.4m以上を測る。いわゆる地山であろう。上層の105層に中世の遺物を含むため、この層上面に遺構の存在を想定したが、遺構はなかった。



- 101 灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂混粘土質シルト～極細粒砂  
 102 明黄褐色(10YR6/8)粗粒砂・灰黄褐色(10YR6/2)粘土質シルトのブロック  
 103 灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト  
 104 にぶい黄褐色(10YR5/3)中礫混粗粒砂に明黄褐色(10YR6/8)粘土質シルトのブロック  
 105 にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂～中礫混粘土質シルト  
 106 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂～大礫・明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂のブロック  
 ② 灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂～中礫混粘土質シルト・明黄褐色(10YR6/8)粘土質シルトのブロック(SD105)

第2図 1区平断面図(S=1/50)

〈検出遺構と出土遺物〉

現地表下0.3~0.5m(標高75.6~75.8m)の103層灰黄褐色砂質シルト上面で、5条の溝状遺構(S D101~105)を検出した。

溝(S D101~105)

S D101

調査区北西端で検出した。南北は調査区外へ至る。検出長2.8m・幅0.25m・深さ0.05mを測る。断面の形状は半円形、埋土は①10YR6/8明黄褐色粘土質シルトである。

S D102

調査区北西端、S D101の東で検出した。北端は調査区外、南端でS D101と合流する。検出長1.9m・幅0.2m・深さ0.05mを測る。断面は半円形、埋土は①である。

S D103

調査区西部中央、S D101・102の東に並行する。北端は途切れ、南端はS D104に切られている。検出長1.9m・幅0.3m・深さ0.05mを測る。断面の形状は半円形、埋土は①である。

S D104

調査区西部南寄り、S D103の南に位置し、S D103を切る。東西に伸び、西は調査区外、東はS D105に切られている。検出長0.9m・幅0.25m・深さ0.05mを測る。断面の形状は半円形、埋土は①である。

S D105

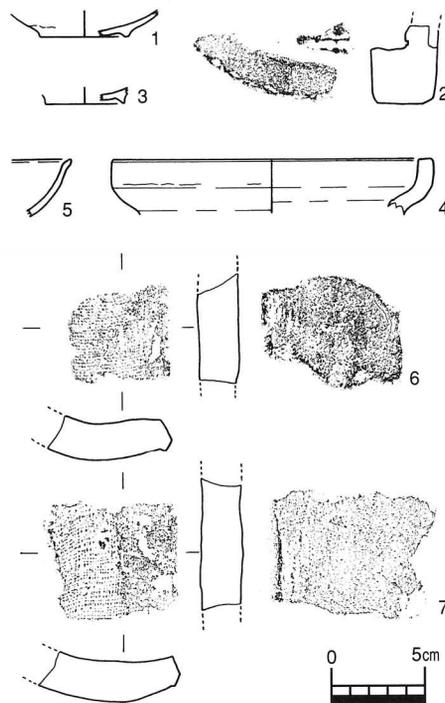
調査区東端で、ほぼ南北に伸びる西側の肩を検出した。検出長5.1m・検出幅0.5~0.8・深さ0.1mを測る。断面の形状は逆台形に近く、底は平坦である。埋土は②10YR6/2灰黄褐色粗粒砂~中礫混粘土質シルト・10YR6/8明黄褐色粘土質シルトのブロックで、炭片を若干含む。内部からは、土師器羽釜等・瓦器椀(1)・軒丸瓦(2)などが出土した。瓦器椀1は低い高台をもつ。軒丸瓦2は外区内縁の界線と珠文を残す。いずれも詳細は不明であるが、13世紀以降のものと考えられる。

〈その他の出土遺物〉

遺構面である103層から瓦器椀(3)・瓦質土管(4)が、地山直上に堆積する105層からは瓦器椀(5)・平瓦(6・7)が出土している。瓦器椀3は断面三角形の低い高台をもつ。瓦器椀5は「大和型」で口縁内面に沈線が巡る。平瓦6・7の凸面には縄目タタキがわずかに残る。いずれも鎌倉時代(13世紀)以降に比定できるが、瓦質土管4は近世初頭(17世紀頃)まで下るものである。

〈小結〉

検出した溝状遺構は、農耕に伴ういわゆる「鋤溝・畝間溝」であろうと思われる。遺構ベースとなる103層に近世初頭の瓦質土管が含まれていることから、当地は、それ以降近年まで農地であったことがわかる。また、地山直上に堆積する105層に13世紀以降の土器類が含まれていることから、当地は、13世紀以降に開発されたこともわかる。



第3図 1区出土遺物実測図(S=1/4)

### 3) 2区の概要

1区から約20m南方に位置する調査区で、南端に3次調査5区を含む。西流する谷の北側に位置する尾根状の高まりに位置し、南端は谷間となっている。旧状は上下二段にわたる耕作地(棚田)である。この上下二段の棚田が調査対象であったが、手違いから工事が先行され、棚田上段(東側)は削平され、下段(西側)は埋め立てられており、上面の標高は、77.6~78.3mの南上がりの平坦地になっていた。

3次調査の結果から、旧状の標高は上段が77~78.5m程度、下段が76.5~77.5m程度であったと考えられる。3次調査-5区で確認した整地層の可能性のある地層は上段南部で認められた。それより上部(標高77.2~78.2m)は作土、それ以下(標高77~78m)が平安時代後期以降の遺構面である。下段では、地山を切り込む石垣が見られ、近年までの耕地が認められた(標高76.2m前後)。なお、南西端では、埋め立てられた谷間の斜面が認められた。

掘削に際しては、まず盛土部分を除去して旧状に復した上で、整地層208層直上までの0.3~0.4mを機械掘削とした。上段南部の削平は、表土201層・旧耕土202層まででとどまっていた。

#### 〈層序〉

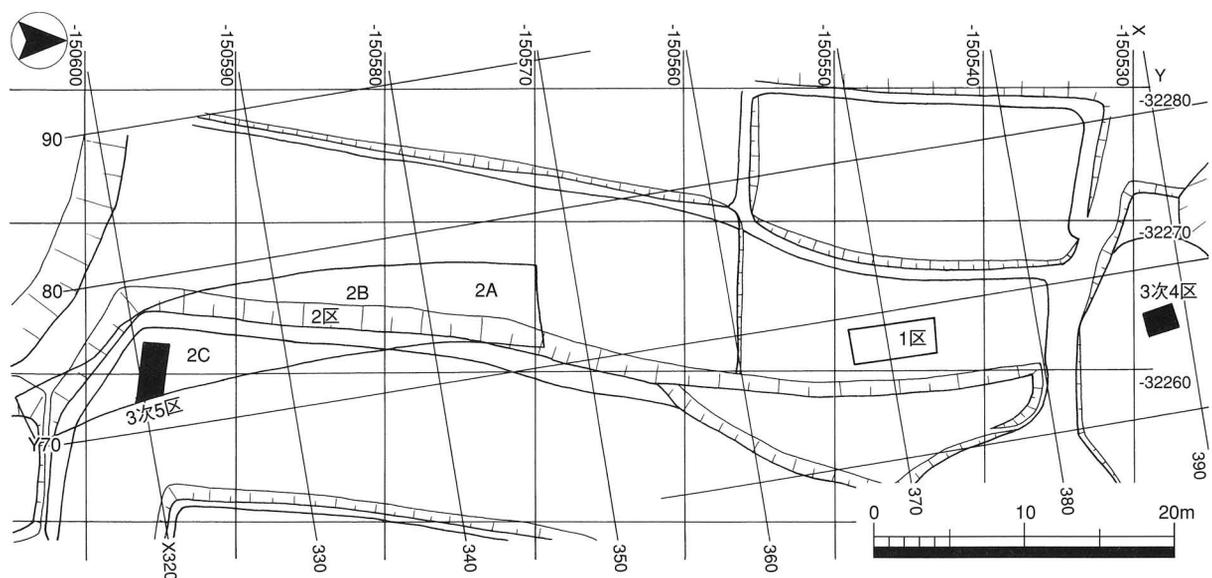
200層：盛土。コンクリート塊・表土・旧耕土を含み、上段の高まりを削って埋め立てたものである。前述のように、下段には1~1.5m程度の盛土がなされており、上段は0.5m前後削平を受けていた。

201層：10YR3/1黒褐色細粒砂混砂質シルト、層厚0~0.5m以上を測る。南西部でのみ確認できたもので、棚田上段から下段への斜面に堆積していた調査直前までの表土である。

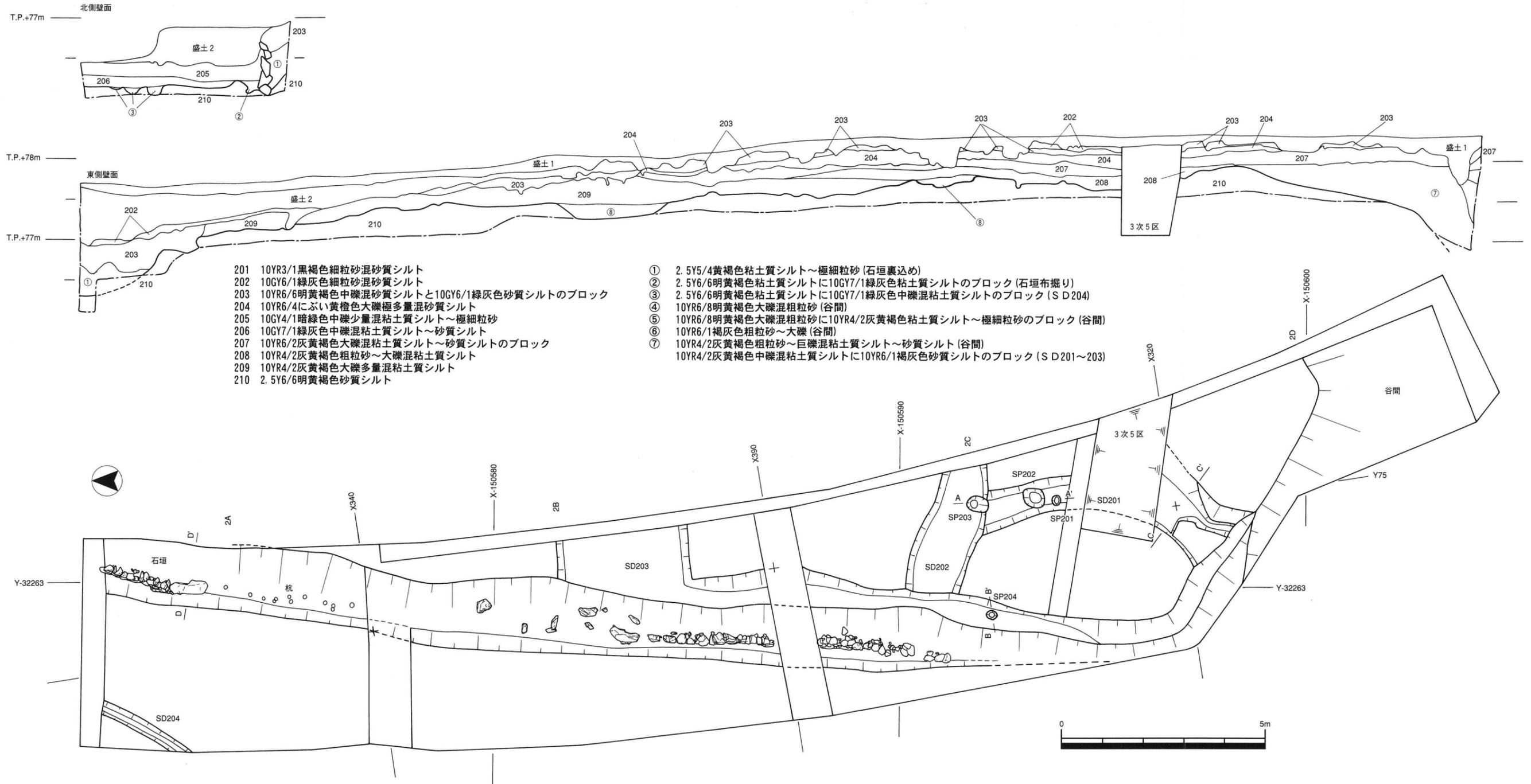
202層：10GY6/1緑灰色細粒砂混砂質シルト、層厚0~0.1m前後、上段の作土である。工事により削平されている部分が多い。

203層：10YR6/6明黄褐色中礫混砂質シルトと緑灰色(10GY6/1)砂質シルトのブロック、層厚0~0.2m、酸化鉄を多量に含む上段の床土である。

204層：10YR6/4にぶい黄橙色大礫極多量混砂質シルト、層厚0~0.2m、酸化鉄を極めて多量に含む。203層同様床土であろう。



第4図 1区・2区設定図 (S=1/500)



第5図 2区平断面図(S=水平1/100・垂直1/50)

205層：10GY4/1暗緑色中礫少量混粘土質シルト～極細粒砂、層厚0.15～0.2m、近年まで耕作されていた下段耕土である。

206層：10GY7/1緑灰色中礫混粘土質シルト～砂質シルト、層厚0.1～0.15m、作土である。下段では、206層直下に210層いわゆる地山があり、210層が最終的な耕作地のベースとなっている。

207層：10YR6/2灰黄褐色大礫混粘土質シルト～砂質シルトのブロック、層厚0～0.2m、3次調査－5区で確認した整地層と考えられ、調査区南部にしか見られない。南端では、この層直下に谷間の埋めたて層④～⑦がある。

208層：10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～大礫混粘土質シルト、層厚0～0.2m、中世までの遺物を含む層で、この層も整地層の可能性があり、207層同様調査区南部にしか見られない。

209層：10YR4/2灰黄褐色大礫多量混粘土質シルト、層厚0～0.3m。207・208層の見られない調査区北部に見られ、遺物を含まない。

210層：2.5Y6/6明黄褐色砂質シルト、層厚0.4m以上、花崗岩の風化した層で、いわゆる地山である。この層上面で、東部(おもに上段)では平安時代後期以降の遺構を、西部(おもに下段)では江戸時代以降の耕作地を検出した。

〈検出遺構と出土遺物〉

東部では、現地表下0.5～0.7m(標高77.2～78m)の210層明黄褐色砂質シルト上面で、平安時代後期以降のピット4個(S P 201～204)、溝状遺構3条(S D 201～203)を検出した。南端では、埋め立てられた谷間が検出された。西部では現地表下1m(標高76.2～76.4m)の210層明黄褐色砂質シルト上面で、鋤溝(S D 204)を伴う耕作地、および石垣を検出した。

ピット(S P 201～204)

S P 201

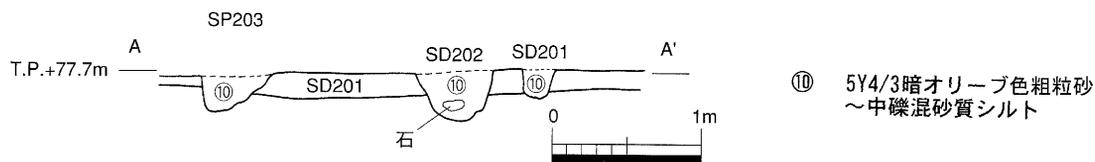
調査区南部2 C区、S D 201上面で検出した。平面の形状は東西にやや長い楕円形を、断面の形状は半円形を呈する。径0.5～0.3m・深さ0.18mを測る。内部には⑩5Y4/3暗オリーブ粗粒砂～中礫混砂質シルトが堆積する。

S P 202

調査区南部2 C区、S D 201上面、S P 201の北隣で検出した。平面の形状は南北に長い隅丸方形を呈し、断面はわずかに二段掘りとなる。一辺0.5～0.6m・深さ0.26mを測る。内部には⑩が堆積し、二段目の肩近くに拳大ほどの礫が1個認められた。

S P 203

調査区南部2 C区、S D 201上面、S P 202の北1mほどで検出した。平面の形状は南北に長い楕円形を呈し、断面はわずかに二段掘りとなる。一辺0.35～0.55m・深さ0.2mを測る。内部には⑩が堆積する。



第6図 S P 201～203断面図 (S=1/50)

## S P 204

調査区南部2C区、S P 203の西2.5mほどで検出した。上部は棚田形成時に削平されているが、径0.2~0.25m・深さ0.05m程度が遺存していた。平面の形状は南北にやや長い楕円形を呈し、断面の形状は深めの半円形を呈していたものと考えられる。内部には⑪5Y4/3暗オリーブ色粘土質シルトが堆積し、底近くから土師器中皿(第9図-8)が出土した。

8の器壁は厚く、体部には一次成形時の指圧痕をよく残し、口縁部はヨコナデされている。これらの特徴から、平安時代後期(11世紀)頃のものと思われる。口径12.0cm・器高2.5cmを測る。

### 溝状遺構(S D 201~204)

#### S D 201

上段南部2C~D区で検出した。南北方向から西へ弧を描いて伸びるが南西部は棚田形成時に削平されている。北端はS D 202に切れ、埋没後にピットS P 201~203が掘られている。検出長6.5m・幅0.8~1.8m・深さ0.15~0.3mを測り、南ほど幅広で深くなる。断面の形状は台形、内部には上から⑧10YR4/2灰黄褐色中礫混粘土質シルトに10YR6/1褐灰色砂質シルトのブロック、⑨10YR4/2灰黄褐色巨礫混粘土質シルトが堆積している。

#### S D 202

上段南部中央2C区で検出した。東西に伸びるが西部は棚田形成時に削平されており、東部は調査区外へ至る。南部でS D 201を切り、埋没後その交点付近にピットS P 203が掘られている。検出長3.2m・幅1.3m・深さ0.15mを測る。断面の形状は二段の掘形を持ち、埋土は⑧10YR4/2灰黄褐色中礫混粘土質シルトに10YR6/1褐灰色砂質シルトのブロックである。

#### S D 203

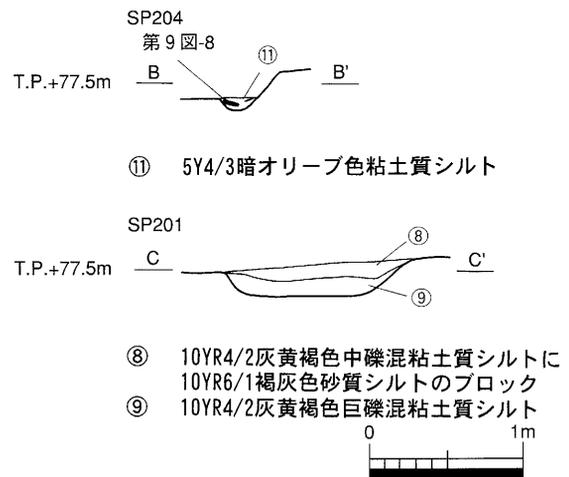
上段中央部2C区で検出した。東西に伸びるが西部は棚田形成時に削平されており、東部は調査区外へ至る。検出長1.5m・幅3.3m・深さ0.18mを測る。断面の形状は台形、埋土はS D 202同様、⑧である。

#### S D 204

調査区北西端、下段2A区で検出した。ほぼ南北に伸び、両端は調査区外へ至る。検出長2.5m・幅0.4m・深さ0.1mを測る。埋土は③2.5Y6/6明黄褐色粘土質シルトに10GY7/1緑灰色中礫混粘土質シルトのブロックである。いわゆる「鋤溝・畝間溝」で、これより西に同様の溝が数条あったことが、北側壁面からわかる。

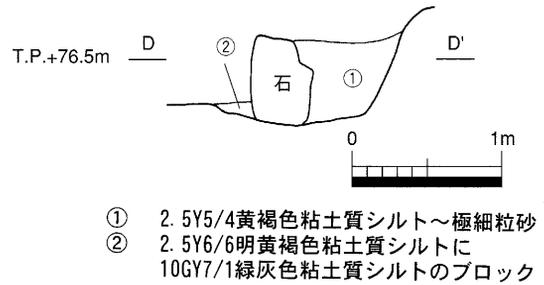
### 石垣

石垣は、斜面の209・210層をL字型にカットし、浅く布掘りし、底に石を据えるもので、この時に、上段の平安時代後期の遺構を削平している。石垣は、調査区北端から2A区北半までは5~6段、高さ1~1.4m程度が遺存しており、その最南端には巨石(南北幅0.95m・東西幅0.4



第7図 S P 204・S D 201断面図(S=1/50)

m・高さ0.6m)が据えられている。そこより南の2A区南半では石垣は欠落しており、杭が打たれていた。さらに南の2B区北半では石は疎らとなり、2B区南半から2C区にかけては、2～3段、高さ0.3～0.4m程度が遺存していた。2A区の巨石は、調査前まで部分的に露出していたものである。石の欠落する部分には、石垣に代わる何らかの施設があったのかもしれない。



第8図 石垣断面図(S=1/50)

石垣の裏込めは①2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト～極細粒砂で充填され、西側の布掘り部分には②2.5Y6/6明黄褐色粘土質シルトに10GY7/1緑灰色粘土質シルトのブロックが堆積している。

石垣裏込めからは、土師器小皿(第9図-9)、瓦質土器鉢(10)のほか、サヌカイト剥片や近世の国産磁器の破片が少量出土している。9はつまみ上げ気味の口縁部をもつもので、8と同じく11世紀代の小皿であろう。口径9cm・器高1.5cmを測る。10は浅鉢Iに分類される。外面に菊花文のスタンプが2個遺存する。小片のため径40cmほどの円形に復元しているが、本来は平面八弁ないし六弁、有脚のいわゆる「奈良火鉢」である。13世紀後半～14世紀以降に出現する器種である。

#### 谷間

調査区南端2D区は南西へ落ちる谷間となっており、210層上面が急角度で落ち込んでいる。斜面には、④10YR6/8明黄褐色大礫混粗粒砂、⑤10YR6/8明黄褐色大礫混粗粒砂に10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト～極細粒砂のブロック、⑥10YR6/1褐灰色粗粒砂～大礫、⑦10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～巨礫混粘土質シルト～砂質シルトのブロックが堆積している。

#### <その他の出土遺物>

遺物は、おもに調査区南部の2C～D地区にかけての208層中から、土師器皿(第9図-11～19)・甕(20)・羽釜(21)、瓦質土器足釜(22・23)、瓦器椀(24～35)・小皿(36)の他、須恵器壺(37)・中国銭(38)などが出土している。

土師器皿は、「ての字状口縁」の最終段階の特徴を持つものや、一段ナデ、口縁端部の面取り、底部から短く立ち上がる口縁部を持つものなどがあり、おおむね12世紀前葉～14世紀前葉に比定できる。羽釜は大和型で14世紀中葉頃のもの、足釜は12世紀末以降に出現する器種である。瓦器椀は、24のみ大和型である。他はすべて和泉型で、外面のヘラミガキは認められず、内面のヘラミガキは粗い。形骸化した高台をもち、見込みに平行ヘラミガキを施すものと、高台が無く、全体に螺旋状ヘラミガキを施すものがあり、13世紀前葉～14世紀中葉に比定できる。

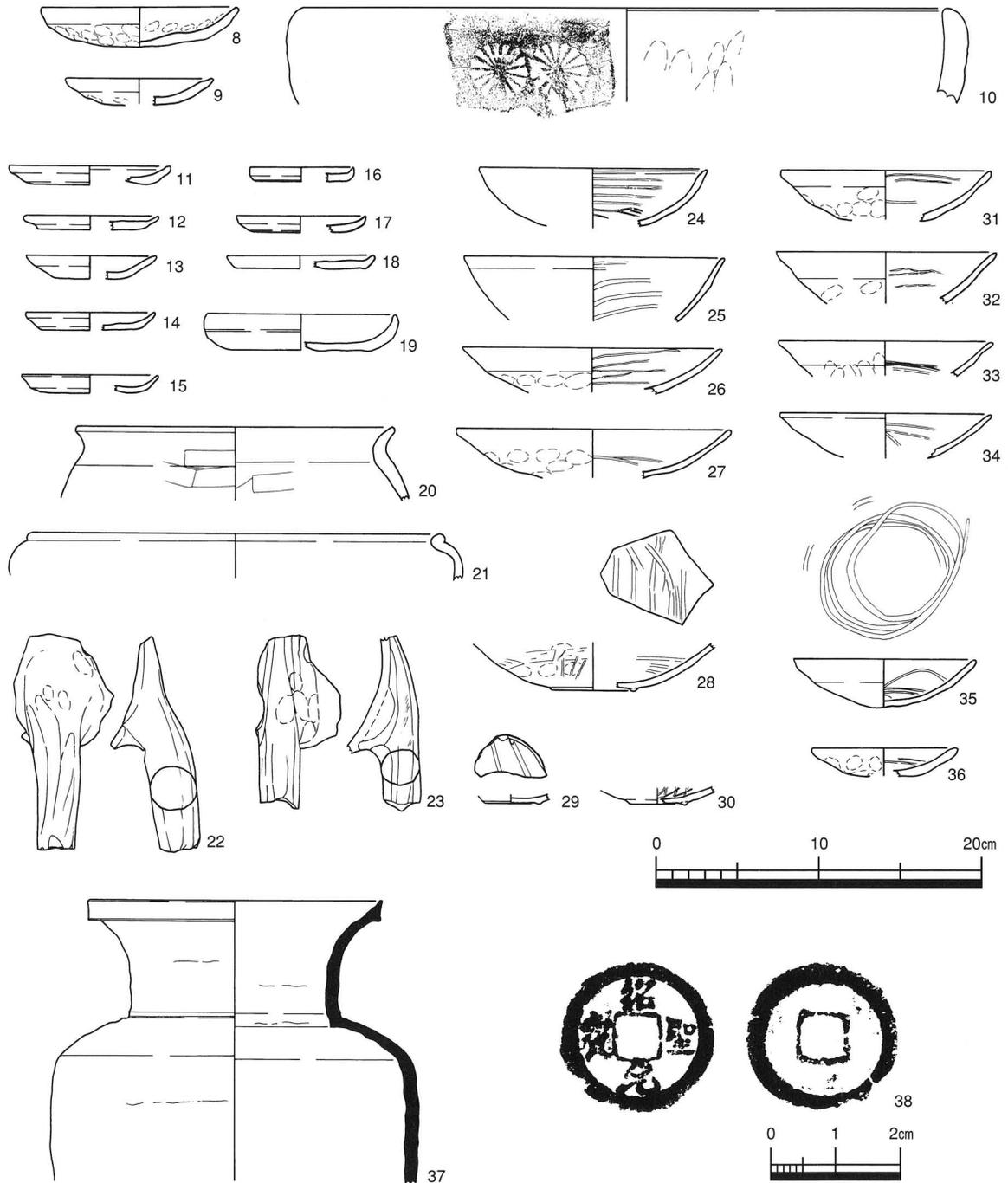
須恵器壺37は、上下に拡張する口縁部や肩が強く張る体部の特徴から、篠窯産に似るが、全体のプロポーシオンは異なる。口径17.9cm・最大径22.7cmを測り、最大径の位置はかなり高い。篠窯の大型壺は、新しくなるに連れ最大径が上位へ移行するとされている。このことから、37が篠窯産であれば、大型壺の最終段階(西長尾3号窯)といえ、時期は10世紀第1四半期(平安時代前期後葉～中期前葉)にあたる。

中国銭38は北宋銭で、「紹聖元寶 折二」である。文字は行書、初鑄は1094年である。銭径22.5～23.5mm・内径18mm・厚さは1mmに満たない。

〈小結〉

出土遺物から、平安時代後期、平安時代末期～室町時代前期頃の生活面があったと考えられる。さらに、須恵器壺37は、さらに古い時期の生活面の存在も示唆している。

一方、棚田に伴う石垣の裏込めからは、近世の国産陶磁器が数点出土していることから、上記の遺構面が削平され、農地となったのは近世のことであり、調査直前までその土地利用はあまり変化していなかったようである。



第9図 2区出土遺物実測図 (S=1/4・1/1)

4) 3区の概要

2区から谷を挟んで南約60m地点、西に広がる扇状地に位置する。上面の標高は79.5~80.1mを測る。現地地表下0.2~0.6m(標高79.3~79.5m)で近世~近代の耕地を検出した。さらに0.2~0.3m(標高79.2m)で中世の土坑および西へ下がる谷状地形を検出した。

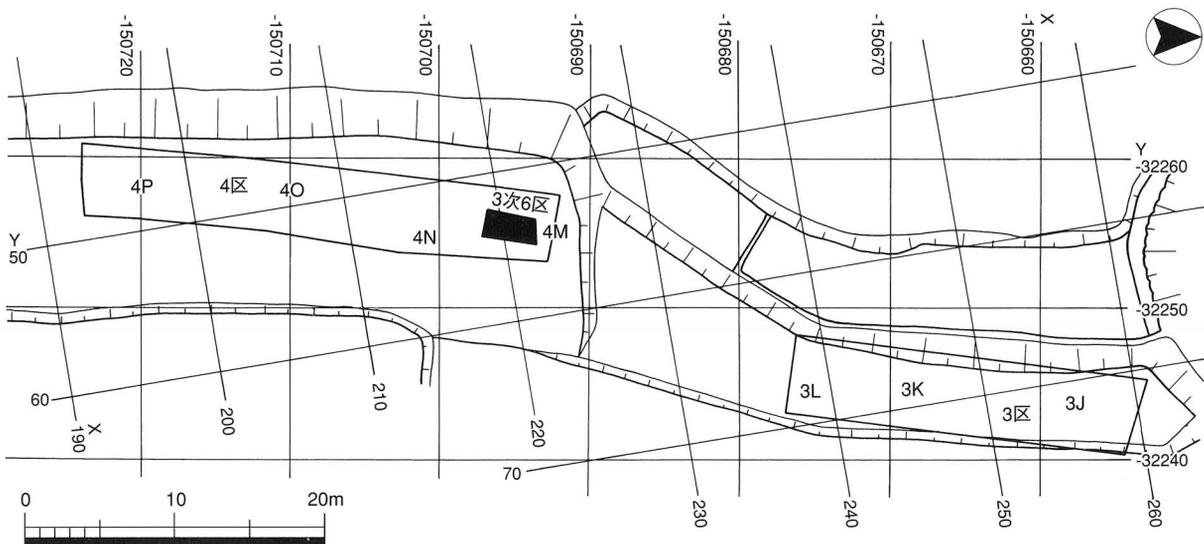
<層序>

- 301層：10YR4/2灰黄褐色大礫多量混砂質シルト、層厚0~0.5m、表土である。機械掘削時にはほとんどが削平されており、南西部の斜面でしか確認できなかった。
- 302層：10YR5/3にぶい黄褐色中礫混砂質シルト、層厚0~0.2m、作土である。301層同様、機械掘削時に削平されている部分がある。
- 303層：10YR6/1褐灰色中礫混粗粒砂と10YR6/6明黄褐色中礫多量混砂質シルトのブロック、層厚0~0.2m、調査区北東部に見られる。
- 304層：10YR6/1褐灰色~10YR6/6明黄褐色中礫混砂質シルト、層厚0~0.2m、303層同様、調査区北東部に見られる。
- 305層：10YR6/1褐灰色粗粒砂混砂質シルトに10GY5/1緑灰色粘土質シルトのブロック、層厚0~0.1m、303・304層同様北東部に見られる。
- 306層：10YR6/6明黄褐色大礫混砂質シルトに10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト・10YR6/1褐灰色粘土質シルトのブロック、層厚0.1~0.3m、この層上面が第1面である。上面の標高は79.3~79.5mを測る。
- 307層：10YR7/6明黄褐色巨礫混砂質シルト、層厚0.3m以上、いわゆる地山である。この層上面が第2面である。上面の標高は79.1~79.3mである。

<検出遺構と出土遺物>

・第1面

現地地表下0.1~0.4m(標高79.3~79.5m)の306層明黄褐色大礫混砂質シルトに灰黄褐色粘土質シルト・褐灰色粘土質シルトのブロック上面で、溝状遺構13条(S D 3101~3113)・落ち込み(S O 3101)を検出した。



第10図 3区・4区設定図 (S=1/500)

第1表 3区第1面溝一覧表

遺構名	埋土	方向	法量(m)			備考	出土遺物				
			検出長	幅	深さ		土師器	瓦器	京焼	唐津焼	肥前焼
S D 3101	②	北東-南西	0.9	0.3	0.05	S D 3108を切る			●		●
S D 3102	②	東西	3.3	0.3	0.15	S O 3101を切る					
S D 3103	②	東西	3.3	0.35	0.15	〃					
S D 3104	②	東西	1.1	0.2	0.1	〃					
S D 3105	②	東西	1.0	0.2	0.1	〃					
S D 3106	②	南北	10.15	—	0.15	東肩のみの検出					
S D 3107	②	南北	10.2	0.4	0.05	南端は途切れる					
S D 3108	②	南北	9.2	0.35	0.05	S D 3101に切られる、南端は途切れる					
S D 3109	②	南北	5.15	0.35	0.05	S D 3101に切られ、S D 3110を切る					39
S D 3110	②	南北	21.5	0.6	0.05	S D 3102・3103・3109に切られ、S D 3113を切る、南端は2条に分かれる	●	●			
S D 3111	②	南北	14.55	0.45	0.1	南端は途切れる		●		40	
S D 3112	②	南北	3.3	0.45	0.05	〃					
S D 3113	②	南北	10.1	0.4	0.15	S D 3102・3103・3113に切られる					

溝状遺構(S D 3101~3113)

溝状遺構はいわゆる「鋤溝・畝間溝」で、北東-南西に伸びるもの1条(S D 3101)、東西に伸びるもの4条(S D 3102~3105)、おおむね南北に伸びるもの8条(S D 3106~3113)がある。S D 3106~3113は、途切れたり、重複したり、切りあったりしている。埋土は②10YR4/4褐色粗粒砂混砂質シルトである。このうち、S D 3101・3109~3111から、国産陶磁器の小片がわずかに出土している(第11図-39・40)。39はS D 3109出土の肥前焼系碗、40はS D 3111出土の唐津焼系碗である。

落ち込み(S O 3101)

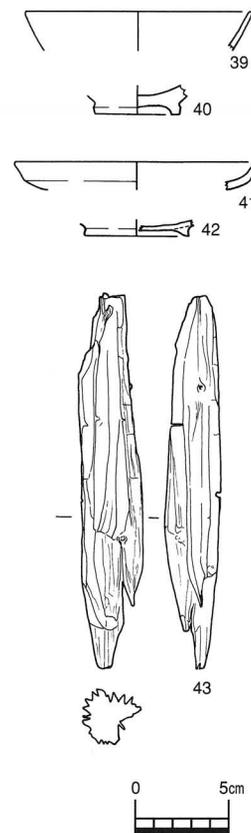
調査区南東部3 K~L区で検出した。南北9 m程度にわたり、東へ約0.4 m落ち込んでいる。埋土は③10YR5/6黄褐色粗粒砂混粘土質シルトと10GY4/1暗緑灰色粗粒砂のブロックと④10GY4/1暗緑灰色粘土質シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトのブロックの2層からなり、人為的に埋められているようである。この落ち込みが埋まった後、S D 3102~3105が掘り込まれている。

・第2面

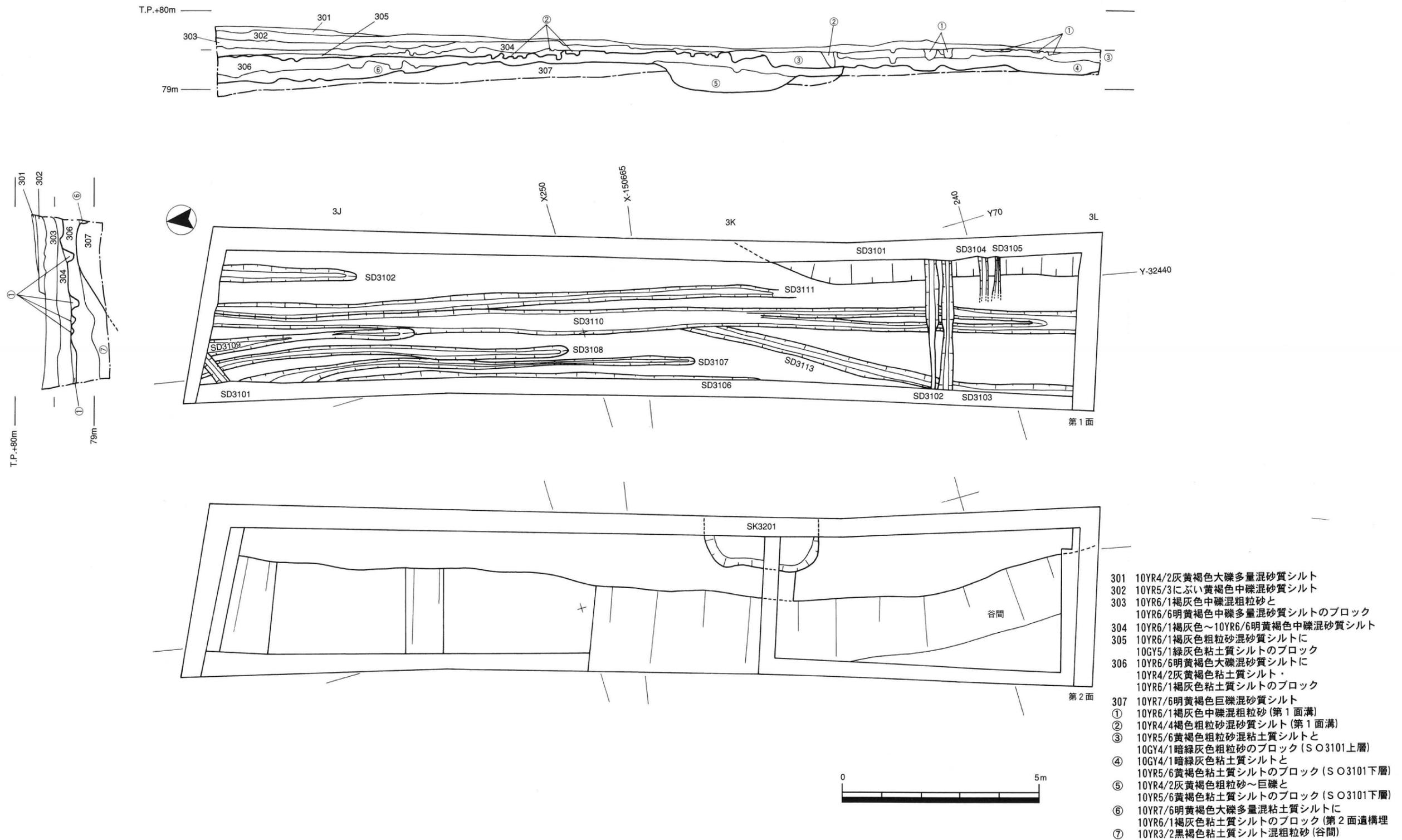
現地表下0.15~0.7 m(標高79.1~79.3 m)の307層明黄褐色巨礫混砂質シルト上面で、土坑1基(S K 3201)、西へ落ちる谷間を検出した。

土坑(S K 3201)

調査区南東部3 K区で、西半を検出した。平面の形状は隅丸方形~円形を呈するものと考えられる。南北3 m・東西1.4 m・深さ0.35 mの規模を測り、底は平坦である。埋土は⑤10YR4/2灰黄褐色粗粒砂~巨礫と10GY5/1緑灰色粘土質シルトのブロックで、人為的に埋められたようである。土師器の小片が1点出土した。



第11図 3区出土遺物実測図(S=1/4)



第12図 3区断面図 (S=水平1/100・垂直1/50)

## 谷間

調査区西半分は、西へ落ちる谷間であった。部分的に掘削しただけであるが、深さは1.4m程度まで確認した。埋土は⑦10YR3/2黒褐色粘土質シルト混粗粒砂で、一部互層となる部分もあり、炭層がブロックとなり混ざる部分もある。内部から、土師器皿・羽釜の小片、杭(第11図-43)などが出土している。

## &lt;その他の出土遺物&gt;

第1面ベースである306層から、土師器小皿(第11図-41)、瓦器椀(42)、サヌカイト剥片が出土している。土師器小皿41・瓦器椀42はいずれも13世紀頃のものであろう。

## &lt;小結&gt;

第1面は近世以降の耕作地、第2面は13世紀頃までの未耕地であろう。

## 5) 4区の概要

3区から南約20m地点、3区同様西に広がる扇状地に位置する。北端に3次調査-6区が位置する。上面の標高は80.5~80.9mである。北西部では、床土直下の現地地表下0.4m前後(標高80.1m)で、谷を埋める近世~近代の整地層を検出した。以下0.4~0.8mには、西へ下がる谷を埋める中世~近世の堆積層(408~410層)があり、直下の標高79.2~79.6mで、中世の柱穴・土坑・溝などを検出した。中世の遺構群は、斜面東の高まりを切り込み、その西側を平坦面とし、そこに構築されている。遺構は、調査区中央部の南北12~13mの範囲で密に検出された。

## &lt;層序&gt;

- 401層：10YR4/2灰黄褐色~5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.3m、表土である。
- 402層：5Y5/2灰オリーブ色中礫混砂質シルト、層厚0~0.15m、作土である。
- 403層：5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂混砂質シルトと7.5YR5/8明褐色中礫混砂質シルトのブロック、層厚0~0.1m、作土である。
- 404層：7.5YR5/8明褐色中礫混砂質シルト、層厚0.05~0.15m、床土である。
- 405層：2.5YR6/3にぶい黄色中礫混砂質シルト、0.1~0.2m、この層上面で、谷間の埋め立てが見られた(第1面)。
- 406層：2.5Y5/2暗灰黄色中礫多量混砂質シルトと10YR5/2灰黄褐色細礫混砂質シルトのブロック、層厚0.05~0.2m
- 407層：10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂極少量混粘土質シルト、層厚0.1~0.3m
- 408層：10YR4/3にぶい黄褐色大礫極少量混細粒砂に5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトのブロック、層厚0~0.3m、調査区北~西部の斜面に堆積する。これ以下410層までは、斜面に堆積するブロック層で、多量の遺物を含んでいる。
- 409層：10YR3/2黒褐色粗粒砂~礫に粘土質シルトのブロック、層厚0~0.25m、408層同様斜面に堆積する。
- 410層：2.5Y5/2暗灰黄色中礫多量混砂質シルト、層厚0~0.15m、408・409層同様斜面に堆積する。
- 411層：10YR4/3にぶい黄褐色~2.5Y5/6黄褐色粗粒砂混粘土質シルト、層厚0.35mまで確認した。この層上面で、中世の遺構を検出した(第2面)。

<検出遺構と出土遺物>

・第1面

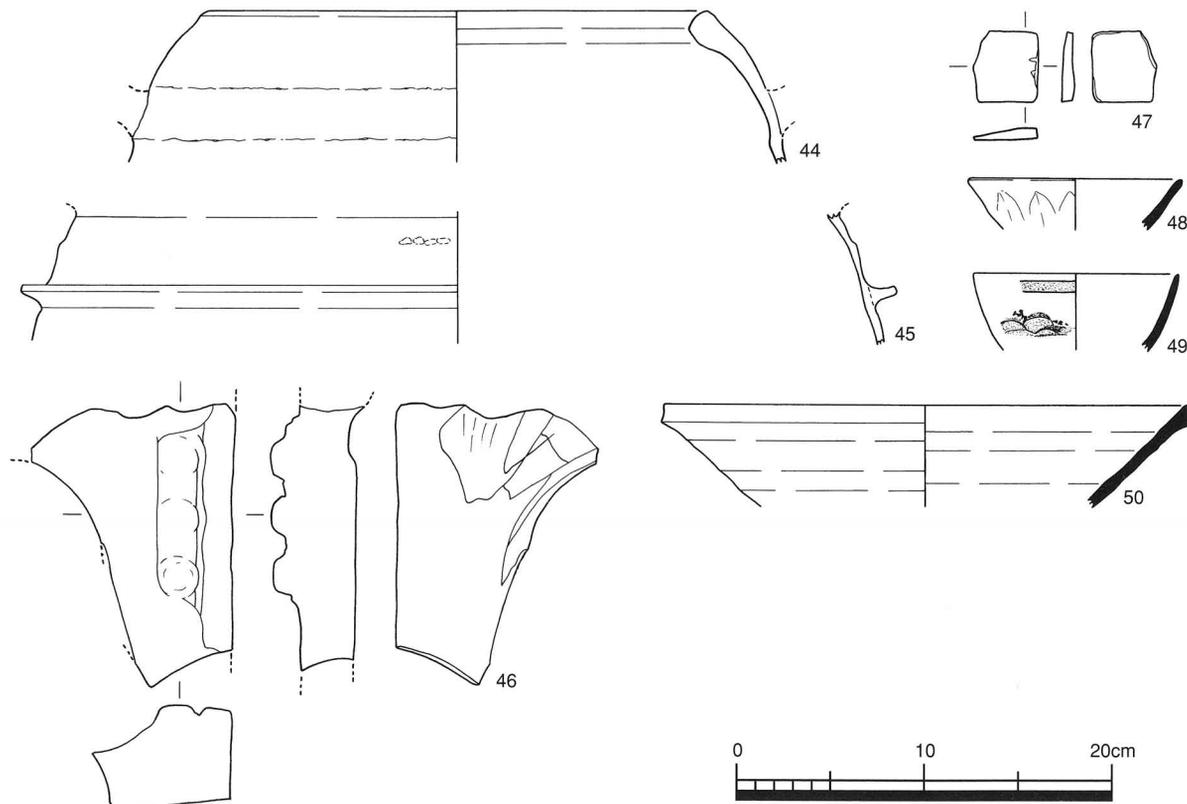
現地表下0.35~0.4m(標高80.4~80.5m)の405層にぶい黄色中礫混砂質シルト上面で、谷間を埋める整地が見られた。整地はI~IIIの3期にわたって行なわれている。

整地I

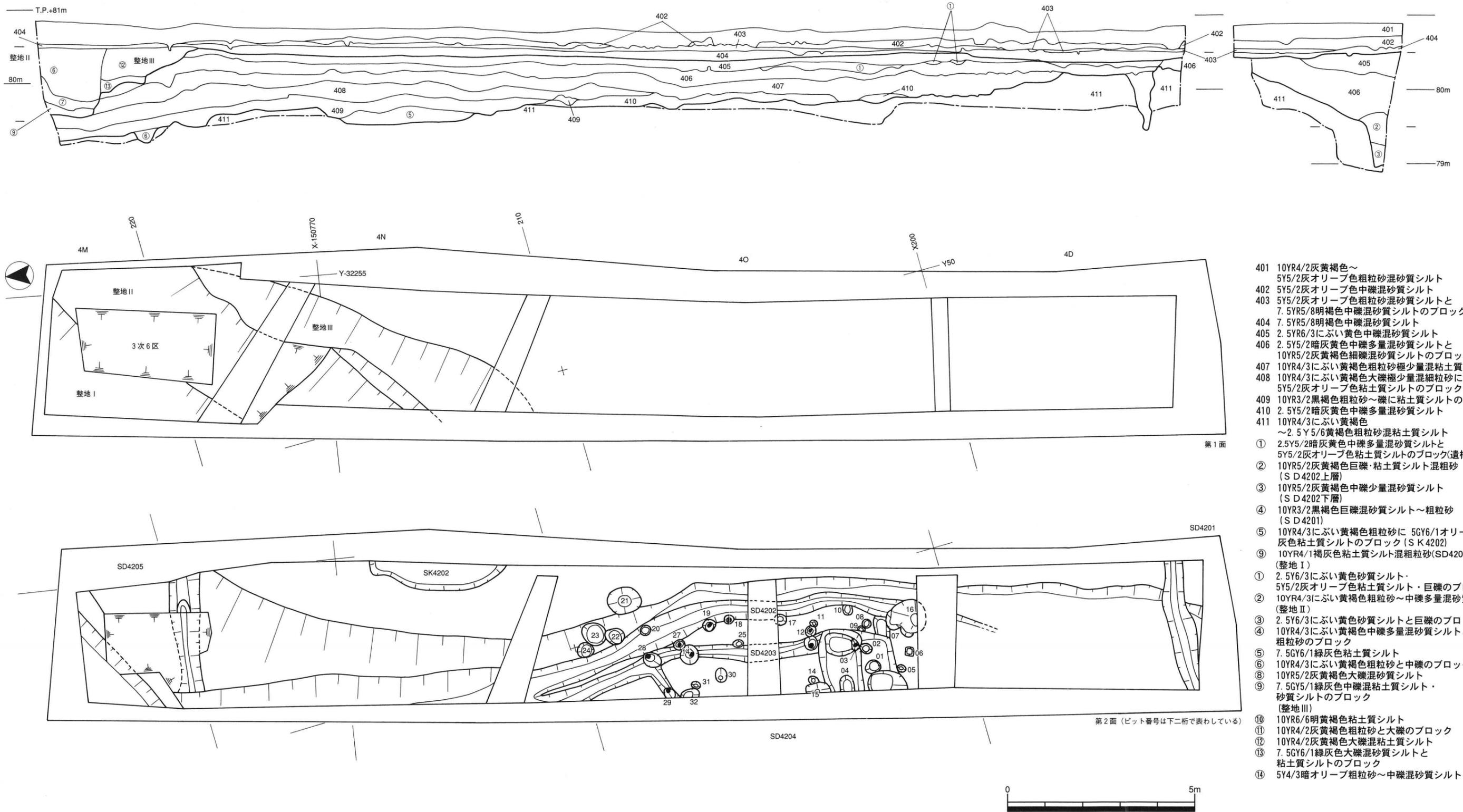
調査区北部4M~N区で検出した。406層までの0.5~0.6m程度が埋められている。埋土はI-①2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト・5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト・巨礫のブロック、I-②10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂~中礫多量混砂質シルトである。瓦器・土師器の小片のほか、13世紀末~14世紀頃の土師器羽釜(第13図-44・45)、鬼瓦(46)、砥石(47)やサヌカイト剥片等が出土している。鬼瓦46は逆U字形の脚の部分のみ遺存している。

整地II

調査区北部、4M~N区で検出した。整地Iから1m程度谷側に位置する。埋め立てIは406・407層を直線的に1m程度掘削し、最終的には411層上面にまで達し、最深部は1.8mを測る。埋土は、II-③2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルトと巨礫のブロック、II-④10YR4/3にぶい黄褐色中礫多量混砂質シルトと粗粒砂のブロック、II-⑤7.5GY6/1緑灰色粘土質シルト、II-⑥10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂と中礫のブロック、II-⑦10YR5/2灰黄褐色大礫混砂質シルト、II-⑧7.5GY5/1緑灰色中礫混粘土質シルト・砂質シルトのブロックである。13世紀前半頃の青磁碗(第13図-48)等が出土している。



第13図 4区出土遺物実測図-1 (S=1/4)



- 401 10YR4/2灰黄褐色～  
5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂混砂質シルト
- 402 5Y5/2灰オリーブ色中礫混砂質シルト
- 403 5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂混砂質シルトと  
7. 5YR5/8明褐色中礫混砂質シルトのブロック
- 404 7. 5YR5/8明褐色中礫混砂質シルト
- 405 2. 5YR6/3にぶい黄色中礫混砂質シルト
- 406 2. 5Y5/2暗灰黄色中礫多量混砂質シルトと  
10YR5/2灰黄褐色細礫混砂質シルトのブロック
- 407 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂極少量混粘土質シルト
- 408 10YR4/3にぶい黄褐色大礫極少量混細粒砂に  
5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトのブロック
- 409 10YR3/2黒褐色粗粒砂～礫に粘土質シルトのブロック
- 410 2. 5Y5/2暗灰黄色中礫多量混砂質シルト
- 411 10YR4/3にぶい黄褐色  
～2. 5Y5/6黄褐色粗粒砂混粘土質シルト
- ① 2.5Y5/2暗灰黄色中礫多量混砂質シルトと  
5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトのブロック(遺構埋土?)
- ② 10YR5/2灰黄褐色巨礫・粘土質シルト混粗砂  
(S D4202上層)
- ③ 10YR5/2灰黄褐色中礫少量混砂質シルト  
(S D4202下層)
- ④ 10YR3/2黒褐色巨礫混砂質シルト～粗粒砂  
(S D4201)
- ⑤ 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂に 5GY6/1オリーブ  
灰色粘土質シルトのブロック(S K4202)
- ⑨ 10YR4/1褐灰色粘土質シルト混粗粒砂(SD4205)  
(整地I)
- ⑩ 2. 5Y6/3にぶい黄色砂質シルト・  
5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト・巨礫のブロック
- ⑪ 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂～中礫多量混砂質シルト  
(整地II)
- ⑫ 2. 5Y6/3にぶい黄色砂質シルトと巨礫のブロック
- ⑬ 10YR4/3にぶい黄褐色中礫多量混砂質シルトと  
粗粒砂のブロック
- ⑭ 7. 5GY6/1緑灰色粘土質シルト
- ⑮ 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂と中礫のブロック
- ⑯ 10YR5/2灰黄褐色大礫混砂質シルト
- ⑰ 7. 5GY5/1緑灰色中礫混粘土質シルト・  
砂質シルトのブロック  
(整地III)
- ⑱ 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト
- ⑲ 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂と大礫のブロック
- ⑳ 10YR4/2灰黄褐色大礫混粘土質シルト
- ㉑ 7. 5GY6/1緑灰色大礫混砂質シルトと  
粘土質シルトのブロック
- ㉒ 5Y4/3暗オリーブ粗粒砂～中礫混砂質シルト

第14図 4区平面図 (S=水平1/100・垂直1/50)

整地Ⅲ

調査区北西端、4 M～N区で検出した。埋め立てⅡから2～3 m程度谷側に位置する。北西へ1.5 m下がる斜面を埋めている。埋土はⅢ-⑨10YR6/6明黄褐色大礫と5Y6/2灰オリーブ粘土質シルトのブロック、Ⅲ-⑩10YR6/6明黄褐色粘土質シルト、Ⅲ-⑪10YR4/2灰黄褐色粗粒砂と大礫のブロック、Ⅲ-⑫10YR4/2灰黄褐色大礫混粘土質シルト、Ⅲ-⑬7.5GY6/1緑灰色大礫混砂質シルトと粘土質シルトのブロックである。Ⅲ-⑬から、18世紀頃になる肥前焼系碗(第13図-49)、12世紀末～13世紀初頭の須恵器こね鉢(50)、瓦等が出土した。

・第2面

現地表下0.9～1.5 m(標高79.2～80 m)の411層にぶい黄褐色～黄褐色粗粒砂混粘土質シルト上面で、土坑2基(S K 4201・4202)、ピット30個(S P 4201～4230)、溝6条(S D 4201～4206)からなる中世の遺構群を検出した。遺構面である411層は、東側の高まりをカットして、テラス状の平坦面をつくり、そこに遺構が構築されている。遺構は、おもに調査区中央南寄りの4 N～O区の南北20 m程度の範囲に密集していた。

土坑(S K 4201・4202)

S K 4201

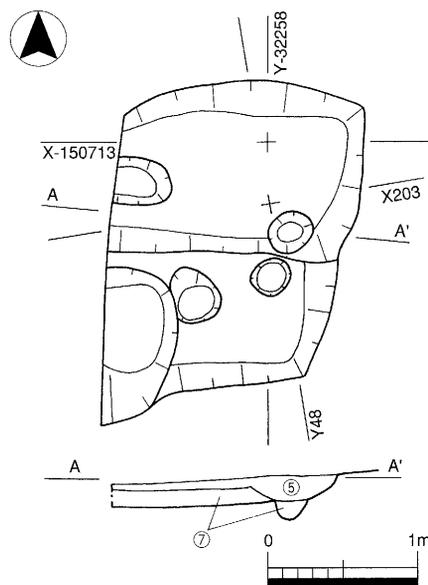
調査区南部4 O区で検出した。方形を呈するものと考えられる。東西1.65 m以上・南北2 mを測る。深さは、北半分が0.2 mと一段低く、南半分は東部が0.1 m・西部が0.15 mと浅くなる。内部に4個のピット(S P 4201～4204)がある。埋土は、全体的に⑤10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂に5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルトのブロックがあり、北側の窪みおよびピットには⑦5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混粘土質シルトに2.5Y5/6黄褐色粘土質シルトのブロックが堆積し、ピットの底には炭層がある。⑤から、13世紀後半の須恵器こね鉢(第16図-51)・瓦質土器足釜(52・53)・瓦器碗の小破片等が出土している。

S K 4202

調査区北部、4 N区で検出した。円形～隅丸方形を呈するものと考えられる。東西0.75 m以上・南北3.5 m以上・深さ0.2 mを測る。埋土は⑤である。

ピット(S P 4201～4232)

調査区中央南部の4 N～O区で32個のピットを検出した。S K 4201内に4個(S P 4201～4204)、その周辺およびS D 4202間に11個(S P 4205～4215)、S D 4202を切るもの5個(S P 4216～4220)、S D 4202の東側に4個(S P 4221～4224)、S D 4203を切るもの4個(S P 4225～4228)、S D 4204を切るもの1個(S P 4229)、S D 4202と4203間に3個(S P 4230～4232)である。柱の痕跡は、S P 4203・4212・4213・4218・4219・4226～4229の9個に認められたが、建物等を復元するには至っていない。詳細は第2表にまとめた。



⑤ 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂に5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルトのブロック  
⑦ 5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混粘土質シルトに2.5Y5/6黄褐色粘土質シルトのブロック  
第15図 S K 4201平面断面図(S=1/50)

内部からは、土師器・須恵器・瓦器等の日常雑器のほか、白磁・青磁などの輸入品も若干出土している。これらのうち、図示できたのは、S P 4219出土の土師器小皿(第16図-54)、瓦器椀(55)、S P 4221出土の瓦器椀(56)、瓦質土器足釜(57)、土師器羽釜(58)である。土師器小皿54は13世紀以降に出現するものと考えられる。瓦器椀55は高台が無く内面に螺旋状の粗いヘラミガキを施す14世紀前半のものである。瓦器椀56は高台・内面のヘラミガキをともに消失する最終段階のもので14世紀末頃に比定できる。瓦質土器足釜57や土師器羽釜58も、その全体的な形態から、14世紀頃まで下る可能性が高い。

溝(S D 4201~4206)

S D 4201

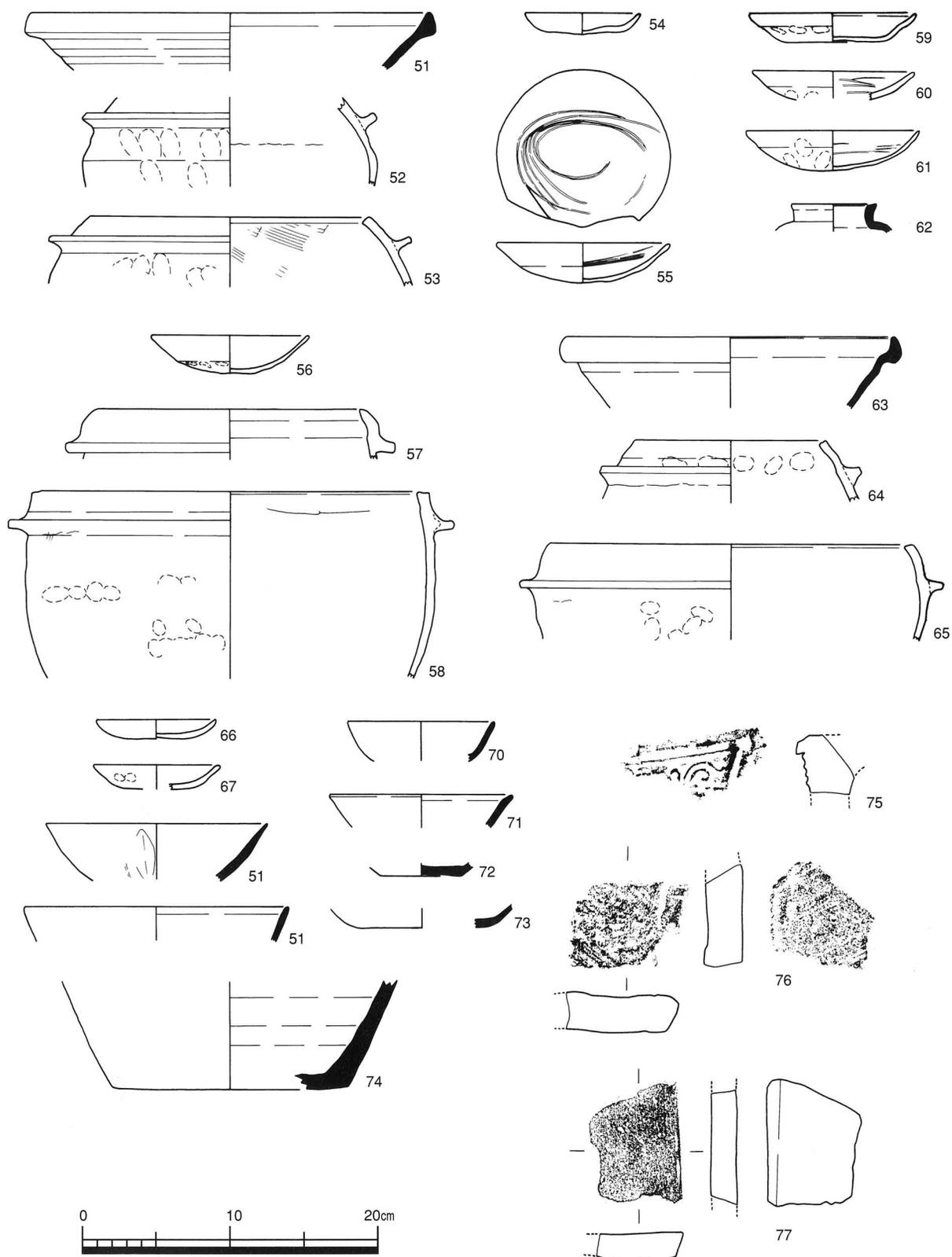
調査区南端、4 P 区で検出した。東西に伸びる溝で、最大幅0.7m・検出長3.6m・深さ0.5mを測る。埋土は④10YR3/2黒褐色巨礫混砂質シルト~粗粒砂である。土師器・瓦器の小片が出土している。

S D 4202

調査区全体を南北に伸びる溝である。南端にはS P 4201が掘り込まれ、それ以南の4 P 区では、不明瞭となり、西へ落ちている。検出長21.5m・最大幅0.9m・深さ0.2mである。埋土は②10YR5/2灰黄褐色大礫・粘土質シルトのブロック混粗粒砂である。

第2表 4区第2面ピット一覧表

遺構名	埋土	長軸	形状	法量			柱根	出土遺物					
				長径	短径	深さ		土師器	須恵器	瓦器	白磁	青磁	サカイト
S P 4201	⑥	南北	卵形	0.45	0.3	0.3							
S P 4202	⑥	東西	楕円形	0.25	0.2	0.25							
S P 4203	⑤⑦	東西	楕円形	0.25	0.2	0.3	●						
S P 4204	⑥	東西?	楕円形?	0.4~	0.4	0.1				●			
S P 4205	⑤⑦	—	円形	0.15	—	0.05		●					●
S P 4206	⑤	—	方形	0.2	—	0.2							
S P 4207	⑤	南北		0.4	0.5	0.1		●		●			
S P 4208	⑤	東西	楕円形	0.25	0.2	0.1							
S P 4209	⑤	—	円形	0.15	—	0.1							
S P 4210	⑤	東西	楕円形	0.3	0.25	0.05							
S P 4211	⑤	—	円形	0.2	—	0.15							
S P 4212	⑤	東西	楕円形	0.3	0.25	0.3	●	●	●	●			
S P 4213	⑧	東西	楕円形	0.4	0.3	0.55	●	●	●	●		●	
S P 4214	⑤	—	円形	0.2	—	0.05							
S P 4215	⑥	南北?	楕円形?	0.65	0.3~	0.1		●		●			
S P 4216	⑤	南北?	—	0.9	0.75~	0.4							
S P 4217	⑤	南北?	楕円形?	3.0	2.5~	0.3		●		●		●	
S P 4218	⑤	—	円形	0.25	—	0.15	●						
S P 4219	⑧	—	円形	0.3	—	0.2	●	55			54		
S P 4220	⑤	—	円形	0.25	—	0.2							
S P 4221	⑧	南北	楕円形	0.9	0.75	0.4				56~58			
S P 4222	⑤	南北?	楕円形?	0.5	0.4	0.15		●		●			
S P 4223	⑤	—	円形	0.65	—	0.2		●		●			
S P 4224	⑤	東西?	楕円形?	0.4~	0.35~	0.2							
S P 4225	⑤	南北	楕円形?	2.5~	2.5	0.15							
S P 4226	⑧	—	円形	0.5	—	0.3	●	●		●			
S P 4227	⑦⑧	南北	楕円形	0.3	0.2	0.4	●	●		●			
S P 4228	⑤	南北	楕円形	0.45	0.3	0.2	●	●		●			
S P 4229	⑤⑧	東西	楕円形	0.4~	0.25	0.3	●						
S P 4230	⑤⑧	東西	楕円形	0.4	0.3	0.25					●		
S P 4231	⑤⑧	南北	楕円形	0.25	0.2	0.1				●			
S P 4232	⑤	南北?	楕円形?	0.5	0.2~	0.1							



第16図 4区出土遺物実測図-2 (S=1/4)

内部から、土師器皿(第16図-59)、瓦器椀(60・61)、須恵器小型壺(62)・こね鉢(63)、瓦質土器足釜(64)、土師器羽釜(65)等が出土している。これらは、他の遺構出土のもの同様13世紀後半～14世紀頃のものであろう。

#### S D 4203

調査区中央南部、4 N～O区で検出した。S D 4202の西側を平行して伸び、北端で合流する。検出長7 m・最大幅0.5 m・深さ0.1 mを測る。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂に5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルトのブロックで、炭を極少量含む。瓦器椀、サヌカイト剥片等が出土している。

#### S D 4204

調査区中央部、4 O区で検出した。S D 4203に直角に取り付く。検出長1.2 m・最大幅0.35 m・深さ0.1 mを測る。埋土は⑨である。

#### S D 4205

調査区北端、4 M～N区で検出した。東西に伸びる溝で、最大幅0.8 m・検出長3 m・深さ0.2 mを測る。埋土は⑨10YR4/1褐灰色粘土質シルト混粗粒砂である。サヌカイト剥片が出土している。

#### <その他の出土遺物>

遺構面上層の408～410層から、相当量の中世の遺物や弥生土器・サヌカイト剥片などが出土しているが、小片が多い。そのうち、図示できたのは、瓦器小皿(第16図-66)、土師器小皿(67)、青磁碗(68～69)、白磁碗(70～72)、白磁皿(73)、須恵器壺(74)、軒平瓦(75)、平瓦(76・77)である。これらは13～14世紀におさまるものであろう。

#### <小結>

第1面の整地Ⅱには、近世の肥前焼系碗49が含まれていることから、埋め立ては近世以降におこなわれたものであることがわかる。

第2面の遺構群は、出土遺物から13～14世紀頃のものと考えられる。居住域に極めて近く、生活に密着したものと言えるが、具体的な建物等を検出するには至らなかった。出土遺物には、日常雑器のほか、青磁・白磁なども出土しており、比較的裕福な層の生活の場であったと言え、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦の出土は、近辺に瓦葺建物のあったことを想定できる。また、弥生土器・サヌカイト剥片の出土は、中世以前、弥生時代頃の生活面の存在を示唆している。

### 3. まとめ

今回の調査は、3次調査の結果を踏まえて行なったもので、3次調査同様、南端の4区で鎌倉～室町時代(13～14世紀)の遺構・遺物が濃密に検出された。これらは、4区から北西40～80 m地点の花岡山遺跡学術調査団調査地(I-第1図 ③-8・9地点)で検出された鎌倉時代前期(13世紀前半)と室町時代前期(14世紀)の建物群と密接なかかわりがあるものであろう。さらに、その他の既往調査の結果なども考え合わせれば、東西約200 m・南北300 mほどの範囲に鎌倉時代前期～室町時代後期の集落があり、当調査地はその東限に位置する可能性が高い。一方、2区では平安時代後期～末期(10～11世紀)の出土遺物もあり、その時期の生活面の存在も想定できる。

# 圖 版



1区全景(北から)



1区最終面全景(北から)



2区調査前の状況(北から)



2区全景(南から)



2区全景(北から)



3区調査前の状況(南から)



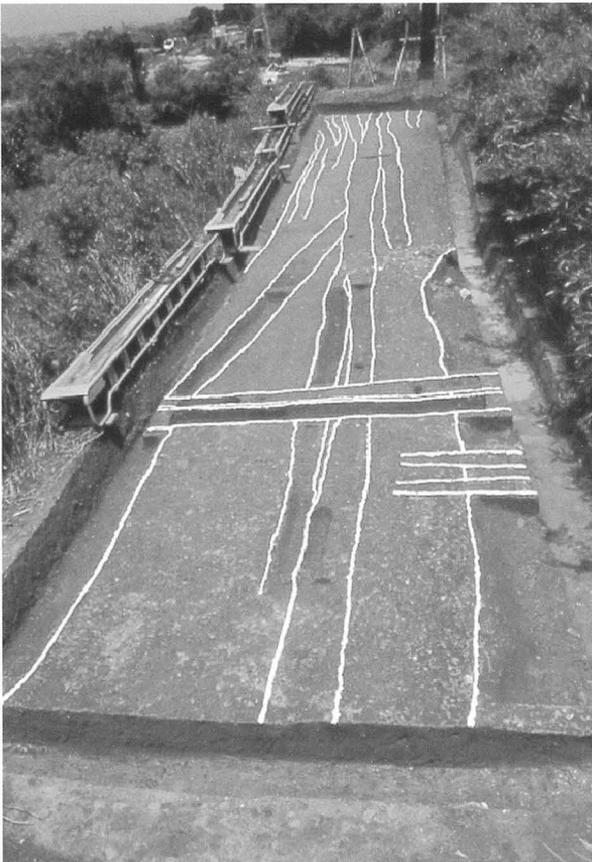
3区第2面遺構掘削状況(南から)



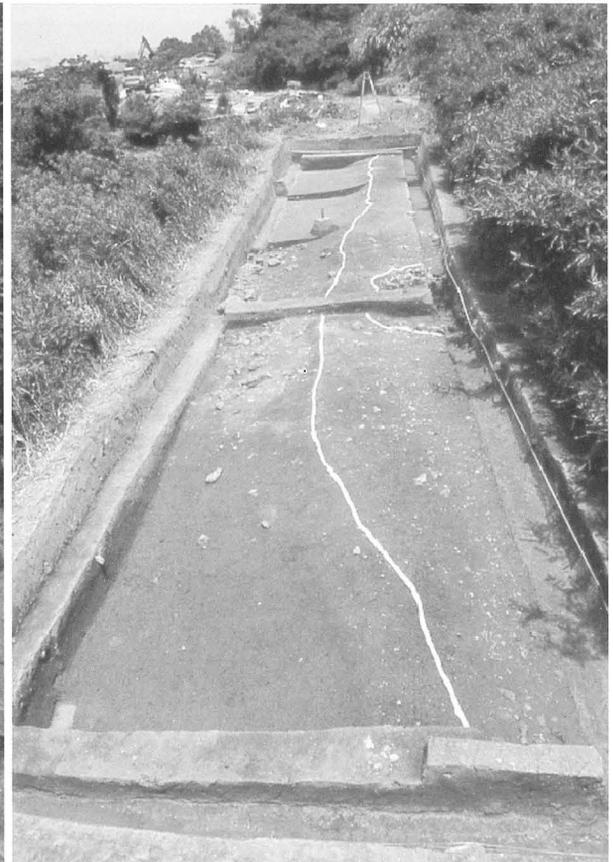
3区第1面遺構掘削状況(北から)



S K3201(北西から)



3区第1面全景(南から)



3区第2面全景(南から)



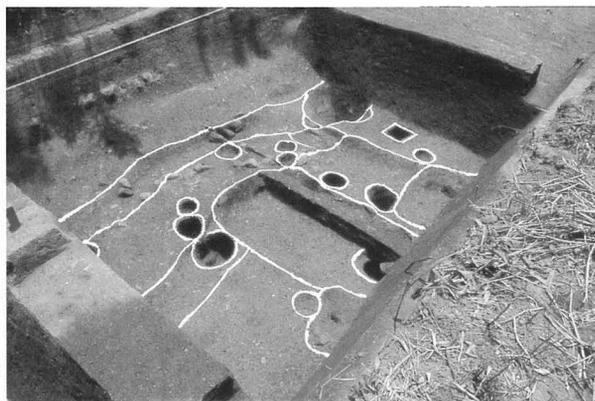
4区調査前の状況(南から)



4区第2面遺構掘削状況(南から)



4区第2面遺構検出状況(南西から)



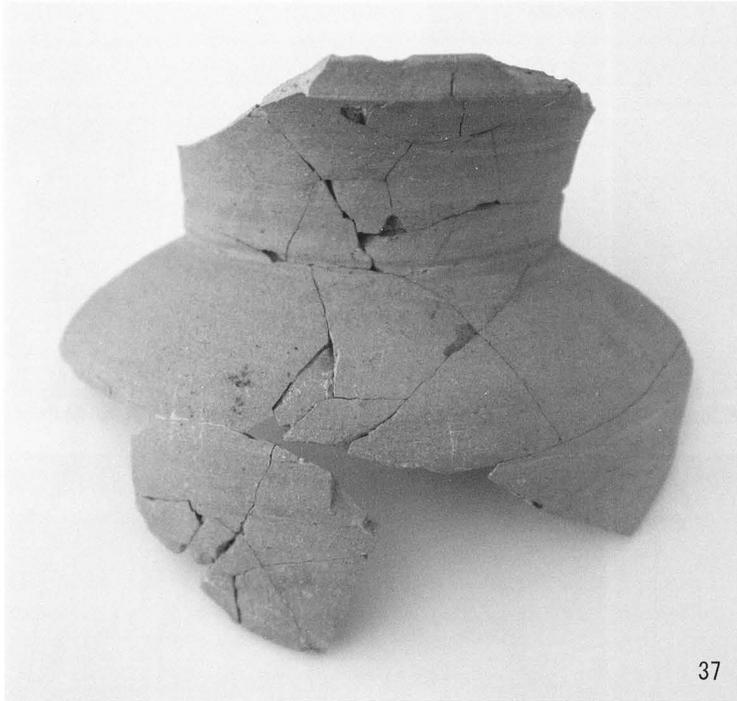
4区第2面遺構検出状況(北西から)



4区第2面全景(南から)



4区第1面(手前)・第2面(奥)全景(北から)



37



8



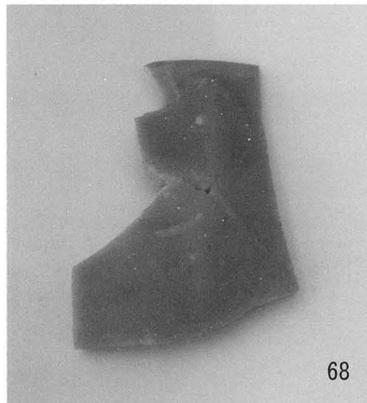
35



48



70



68



72



55



69



73



59

出土遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく87
書 名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告87
副 書 名	I 花岡山遺跡・高安古墳群(第3次調査) II 花岡山遺跡・高安古墳群(第4次調査)
巻 次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	87
編集者名	成海佳子
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
ほなおかやまいせき 花岡山遺跡 たかやすこふんぐん 高安古墳群 (第3次調査)	おおさかふやおしおおあざがくおんじちない 大阪府八尾市大字楽音寺地内	27212	77	34° 38' 16"	135° 39' 03"	20040311 ～ 20040331	約48㎡	農道敷設
ほなおかやまいせき 花岡山遺跡 たかやすこふんぐん 高安古墳群 (第4次調査)	おおさかふやおしおおあざがくおんじちない 大阪府八尾市大字楽音寺地内	27212	77	34° 38' 21"	135° 39' 04"	20041215 ～ 20050624	389.25㎡	農道敷設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
花岡山遺跡 (第3次調査)	集落	鎌倉時代	土坑・溝	土師器小皿、瓦器碗	
		室町時代	土坑・溝・落ち込み	須恵器甕・こね鉢、 瓦質土器こね鉢	
		江戸時代時代	溜池	国産陶磁器、瓦質土 管、瓦	
花岡山遺跡 (第4次調査)	集落	平安時代	ピット	土師器小皿・須恵器 壺	
		鎌倉時代	ピット・土坑・溝	土師器小皿・瓦器碗・ 瓦質羽釜・青磁・白 磁・瓦・中国銭	
		江戸時代	谷間・谷間を埋める 整地・耕作地(石垣・ 畝間溝)	国産陶磁器	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告87

I 花岡山遺跡・高安古墳群（第3次調査）

II 花岡山遺跡・高安古墳群（第4次調査）

発行 平成18年3月  
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2  
TEL・FAX (0729) 94-4700

印刷 (株)近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
図版 マットアート <110Kg>

